

博 多 127

—博多遺跡群 第166次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1039集



2009

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との交易や文化交流の門戸として栄えてきた「博多」の発掘は、近年の都市部の再開発に伴い、現在までに180次の調査をこえ、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は、博多区祇園町地内のビル建設に先だって発掘調査を実施した博多遺跡群第166次調査の概要を報告するものです。発掘調査では、弥生時代から鎌倉時代にいたる様々な遺構や遺物を発見することができました。調査では、中世都市「博多」の町の跡とともに、そのもとになった古代の官衙（役所）に関連すると思われる特殊な遺物や、それ以前の大型古墳の周溝の可能性が考えられる壇状遺構、朝鮮半島を含む様々な地域からもたらされた土器などが発見されています。これらの調査成果は、「博多」が古くから交流の拠点として重要であったことを示し、その歴史と文化の足跡を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施についてご理解をいただき、調査費用の負担をはじめとする多大なご協力を賜った株式会社高松組をはじめとする関係各位の方々に対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成18（2006）年9月27日から同月12月18日まで発掘調査を実施した、事務所・店舗ビル建設に伴う博多遺跡群第166次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物をSB、堅穴住居（堅穴建物）をSC、溝状遺構をSD、土坑をSK、性格不明遺構（プラン不明瞭遺構や遺物層などを含む）をSX、柱穴および性格不明のピットをSPとしている。遺構番号は、調査時の番号をもとに一部整理・修正して報告した。なお調査面は3面あり、第1面の検出遺構は000～（ピットは1001～）、第2面遺構は201～（ピットは2001～）、第3面遺構は301～（ピットは3001～）の番号を付している。
3. 本書の遺構実測図に用いる方位北は、個別遺構に関しては特に断りのない限り国土座標北（G.N.）であるが、磁北（M.N.）を用いる場合もある。磁北は真北に対し $6^{\circ} 20'$ 西偏するが、国土地理院地図の座標北からは $6^{\circ} 40'$ の西偏である。国土座標は日本測地系（第II系）である。調査区の座標系は任意であるが、教育委員会理文課が博多部の道路に設置した国土座標測量基準杭より座標値を移動して調査区内の測量杭の国土座標上の位置を求めている。ただし、近年における多くの道路工事・ビル建設工事の影響や、特に2度にわたる福岡県西方沖地震（2005年3・4月）の影響により、基準測量杭の各座標値に最大10cm程度の誤差が生じている可能性がある。また標高は、埋蔵文化財調査が設置した測量基準杭のレベルから移動して用いている。
4. 本書に用いる遺構実測図は、主に久住猛雄（埋蔵文化財第1課）が作成したが、専田絹代、豊田忠一、武田潤子（以上、発掘作業員）の助力を得た。遺物実測図は、上方高弘（埋蔵文化財調査員）、小嶋鷲（福岡大学大学院）、夏木大吾（福岡大学生）、田尻直子、楠瀬慶太、三阪一徳（九州大学大学院）、天野正太郎（九州大学生）、山崎悠郁子（別府大学生）、久住が作成した。鉄滓と鉄製品については、長家伸（埋蔵文化財第2課）が分類を行い、実測図を作成した。拓本採取は宇野美嘉、坂井かおり、成清直子（以上、整理作業員）が行った。遺構および遺物実測図の製図は、坂井、成清、小嶋、夏木、山崎および本田浩二郎（埋蔵文化財第1課）、森本幹彦（埋蔵文化財第2課）、田上勇一郎（埋蔵文化財センター）、西堂将夫（埋蔵文化財課技能員）、久住が行った。なお石器の一部は吉留秀敏（埋蔵文化財第1課）が実測および製図を行った。
5. 本書に用いる遺構写真および遺物写真は久住が撮影した。使用した写真には、35mmカメラおよび 6×7 判カメラによる白黒フィルム写真と、遺物写真にはデジタル35mm一眼レフカメラによるデータ画像の両者がある。
6. 本書の編集・執筆は久住が行なったが、石器・石製品については夏木大吾、吉留秀敏が執筆し、また動物遺存体については屋山洋（埋蔵文化財第1課）が観察表の作成と執筆を行った。
7. 調査に関わる出土遺物と記録類は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

目 次

本 文 目 次

I.はじめに	1	Fig.34 SK245(上層)出土窓実測図(1/8).....	31
1. 調査に至る経緯	1	Fig.35 宮都系(畿内系)土器陪実測図(1)(1/4).....	31
2. 調査の組織	1	Fig.36 第1面上(検出時)出土遺物実測図(1)(1/4).....	31
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2	Fig.37 第1面上(検出時)出土遺物実測図(2)(1/4,一部1/3).....	32
II.調査の記録	5	Fig.38 第1面上出土遺物(3), 第1面出土瓦実測図(1/4,一部1/3).....	33
1. 調査の概要	5	Fig.39 第1面下～第2面上包含層出土遺物(1), 第2面下包含層出土遺物(1)実測図(1/4,一部1/3).....	34
2. 調査の経過	6	Fig.40 SX301および第3面遭構出土遺物, 第2面下～第3面上包含層出土遺物(2)実測図(1/4,一部1/6)(6～8世紀土器).....	35
3. 第1面の調査	11	Fig.41 SX301, SX302出土大型土器実測図(1/6, 1/8).....	36
4. 第2面の調査	18	Fig.42 第1面下～第2面上包含層出土遺物(2), 第2面下包含層出土遺物(2)実測図(1/4,一部1/3).....	37
5. 第3面の調査	23	Fig.43 第1・2面遭構および第1面上(検出時)出土遺物実測図補(1/4).....	37
6. 出土遺物	31	Fig.44 博多166次出土土鍬実測図(1/8).....	37
(1) 土器・陶磁器および土製品	31	Fig.45 博多166次出土鉄製品(1/2), フイゴ羽口・鉄津(1/3)実測図.....	38
(2) 鉄製品および鉄滓・フイゴ羽口	38	Fig.46 石製品実測図(1)玉作り関連資料(1/1, 1/2).....	39
(3) 博多166次出土の玉作り関連資料について	39	Fig.47 石製品実測図(2)(1/1, 1/3).....	40
(4) 博多166次出土の石製品について	41	Fig.48 石製品実測図(3)(1/3).....	42
(5) 博多166次出土動物遺存体について	43	Fig.49 ガラス培塿, 鉛素材実測図(1/3, 1/2).....	44
(6) その他の特殊遺物	44	Fig.50 銅製瓶実測図(1/1).....	44
III.まとめ	46	Fig.51 朝鮮半島系土器, 宮都系土器等(2), 古式土器, 弥生土器実測図(1/3, 1/4).....	45

挿 図 目 次

Fig. 1	博多遺跡群と周辺の遺跡(1/25,000).....	2	Fig.52 SX301と古墳想定後元図(1/500).....	46
Fig. 2	博多遺跡群調査区位置図(1/8,000).....	3		
Fig. 3	博多遺跡群第166次調査区位置図(1/1,000).....	5		
Fig. 4	博多166次調査区全体図(施標・グリッド図)(1/250).....	6		
Fig. 5	第1面全體図(遭構分布図)(1/100).....	7		
Fig. 6	試掘トレントシ土層図(1/40).....	8		
Fig. 7	II・III区間第1面下地盤層遭構分布図(1/100).....	8		
Fig. 8	第2面全體図(遭構分布図)(1/100).....	9		
Fig. 9	第3面全體図(遭構分布図)(1/100).....	10		
Fig.10	SK055, SK014・052実測図(1/40).....	12		
Fig.11	SK098, SK050下層遺物出土状況実測図(1/25).....	13		
Fig.12	第1面遭構実測図(1)(SK084ほか)(1/50).....	14		
Fig.13	第1面遭構実測図(2)(SE005・039ほか)(1/50).....	15		
Fig.14	第1面遭構実測図(3)(SK013, SK002ほか)(1/50).....	16		
Fig.15	第1面遭構実測図(4)(SK021・025, SK017)(1/50).....	17		
Fig.16	III区第1面表面層上SA01, II・III区間第1面下地盤層SA02実測図(1/50).....	17		
Fig.17	第1面SX066, SX070ほか実測図(1/50).....	18		
Fig.18	第2面遭構実測図(1)(SK224, SK230・235ほか)(1/50).....	18		
Fig.19	SK202実測図・土層図(1/40).....	19		
Fig.20	SK210実測図(1/30).....	19		
Fig.21	第2面遭構実測図(2)(SK245, SK204ほか)(1/50).....	19		
Fig.22	第2面遭構実測図(3)(SK205, SK203ほか)(1/50).....	20		
Fig.23	第3面遭構実測図(1)(SD305, SD309・310ほか)(1/50).....	21		
Fig.24	第3面遭構実測図(2)(SD318・319, SB01)(1/50).....	21		
Fig.25	第3面遭構実測図(3)(SX312, SC303・308ほか)(1/50).....	22		
Fig.26	SX301大溝(古墳局溝?)実測図(1/100).....	23		
Fig.27	SX301ほか調査区北西壁面土層図(1/40).....	23		
Fig.28	第1面遭構出土遺物実測図(1)(1/4).....	25		
Fig.29	第1面遭構出土遺物実測図(2)(1/4).....	26		
Fig.30	第1面遭構出土遺物実測図(3)(1/4).....	27		
Fig.31	第1面遭構出土遺物実測図(4)(1/4,一部1/3).....	28		
Fig.32	第1面遭構出土遺物実測図(5)(1/4,一部1/3).....	29		
Fig.33	第2面遭構出土遺物実測図(1/4).....	30		
			表1. 試掘トレント(西側)土層(Fig. 6)注記.....	8
			表2. SK055ほか土層(Fig.10)注記.....	12
			表3. SK202土層(Fig.19)注記.....	19
			表4. SC303南北土層(Fig.25)注記.....	22
			表5. SX301ほか調査区北西壁面土層(Fig.27)注記.....	24
			表6. 博多166次出土動物遺存体同定一覧表.....	44

表 目 次

表1.	試掘トレント(西側)土層(Fig. 6)注記.....	8
Ph. 1	SK000近世禰痕人骨出土状況(北から).....	11
Ph. 2	第1面I区遭構検出状況(南西から).....	11
Ph. 3	第1面II区遭構検出状況(北から).....	11
Ph. 4	SK050, SK014掘削状況(北西から).....	12
Ph. 5	SK017完掘状況(北から).....	12
Ph. 6	SK018上層遺物出土状況(北から).....	13
Ph. 7	SK018掘削・土層状況(北から).....	13
Ph. 8	SK026完掘状況(南西から).....	13
Ph. 9	SE005(奥), SK039(042)(手前)掘削状況(北西から).....	13
Ph.10	SE039(042)第3面以下完掘状況(北西から).....	15
Ph.11	SK245輪台付施出土状況(南西から).....	20
Ph.12	SX301掘削状況, 区II(SX301下部)遭構検出状況(南西から).....	20
Ph.13	SD305土層断面状況(南から).....	22
Ph.14	SC303(中央), SD305(左), SD304(奥)検出状況(南から).....	22
Ph.15-18	鈎台付施写真・X線写真.....	31
Ph.19	ガラス培塿片写真.....	44
Ph.20	鉛素材(?)写真.....	44
Ph.21	銅製瓶写真.....	45

裏表紙写真 第1面調査状況(西から)

裏表紙写真 左:第1面全景, 右:第3面全景(いずれも北西から)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成18年5月22日付で、株式会社ユニカより、博多区祇園町279番における店舗付共同住宅およびタワーパーク建設工事について、文化財保護法に基づく事前審査申請書が福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課事前審査係に提出された（事前審査番号18-2-179）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多跡跡群（分布地図番号049-0121）に含まれており、周囲の発掘調査の成果から、埋蔵文化財が存在する可能性はきわめて高いと判断され、予定される工事内容はこれに影響を及ぼすことが懸念された。このため申請者に対し、申請地における埋蔵文化財の有無を確認するための確認調査の実施を要請した。これを受け、申請者側との協議が行われ、平成18年6月8日に確認調査を行うことになった。なお申請地には、敷地南側に三洋電機株式会社福岡支店九州ビルが以前に存在しており、これが解体撤去されていた。このビルには地下室が存在したため、埋蔵文化財は擾乱され消失しているものと判断され、ビルが存在した南北分については調査対象から除外するものとされた。

確認調査は、埋蔵文化財が遺存していると考えられた北側にトレチを掘削した。その結果、地表GL-175cmおよびそれ以下において、中世から古墳時代の遺物包含層を検出した。明確な遺構の存在は不明確であったが、包含層には遺物が多く含まれ、また周辺の調査成果から土層が漸移する包含層間に遺構面が存在することが確実であると考えられた。この結果により、この遺物包含層に工事の影響が及ぶ場合には、事前に記録保存のための発掘調査が必要であると判断された。

この確認調査の結果を受け、埋蔵文化財第1課と申請者である株式会社ユニカとの間で協議を行い、記録保存のための発掘調査を行うことで合意を得た。発掘調査については、申請者の仲介により、ビル建設の本体工事を工事原因者から請け負った株式会社高松組が発掘調査に関する協議や条件整備などについてもこれを請け負うことになり、その委託者となった。平成18年9月20日付で、株式会社高松組を委託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が福岡市教育委員会との間で締結され、平成18年9月27日より申請地における本調査を行うこととなった。

その後、申請地における本調査は平成18（2006）年12月18日に終了した。整理作業および発掘調査報告書作成は、当初は平成19年度に行う予定であったが、調査担当者の業務量等を考慮し、委託者と協議の上これを変更し、平成20年度に整理作業を行い、同年度末に報告書を刊行することになった。

2. 調査の組織（平成18年度は本調査年度、平成20年度は整理・報告年度）

調査委託 株式会社高松組

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

調査総括 埋蔵文化財第1課長 山口譲治

埋蔵文化財第1課調査係長 山崎龍雄（平成18年度）、米倉秀紀（平成20年度）

調査庶務 文化財管理課管理係 鈴木由喜（平成18年度）、古賀とも子（平成20年度）

事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係 本田浩二郎（平成18年度）、藏富士寛（平成20年度）

調査担当 埋蔵文化財第1課調査係 久住猛雄

本調査においては、多くの発掘作業員の方々の協力を得た。整理作業は、担当者の指示のもと、宇野美嘉、坂井かおり、成瀬直子、松下伊都子（以上、整理作業員）が行った。遺物の実測は、上方弘高（埋蔵文化財調査員）、小島廣（福岡大学大学院）、夏木大吾（福岡大学学生）、田尻直子、楠庭慶太、三阪一徳（九州大学大学院）、天野正太郎（九州大学学生）、山崎悠輔子（別府大学学生）、久住が行った。拓本採取は宇野、坂井、成瀬が行った。鉄洋と鉄製品については、長家伸（埋蔵文化財第2課）が分類と実測を行った。またその観察所見についてご教示を得た。製図は、坂井、成瀬、小島、夏木、山崎および本田

治二郎（埋蔵文化財第1課）、森本伸彦（埋蔵文化財第2課）、田上勇一郎（埋蔵文化財センター）、西堂特夫（埋蔵文化財課技師員）、久住が行った。なお石器の一部は吉留秀敏（埋蔵文化財第1課）が実測および製図を行った。また動物遺存体については、星山洋（埋蔵文化財第1課）が観察と分類を行い、表の作成と報告の執筆を行った。最後に、本調査に至る協議・契約および条件整備などについて、委託者である株式会社高松組とその担当者の方には埋蔵文化財調査に対する深い理解とご協力を得た。これら関係各位の方々に対し、特に記して感謝申し上げたい。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、玄界灘に開口する博多湾の沿岸中央部、那珂川と御笠川の河口部に形成された砂丘上に立地する弥生時代前期から近現代まで連続と続く複合遺跡である（Fig. 1）。遺跡群の範囲は南北約1.5km、東西は約1.0kmを測る。遺跡群が立地する砂丘は現在も残る微地形や、これまでの調査成果から推定して大きく三列が認められる。三列の砂丘は、内陸側から砂丘列Ⅰ（砂丘1）、砂丘列Ⅱ（砂丘2）、砂丘列Ⅲ（砂丘3）と仮称され、内陸側の砂丘1・2は「博多濱」、海側の砂丘3は「息ノ浜（沖ノ浜）」と呼称されている。弥生時代から古代の遺構の展開は博多濱（Fig. 2）にはほぼ限られ、息浜は古代に僅かに遺構が展開するが、ほとんどの遺構は中世（博多では11世紀後半以降を「中世」とする）以降である。以下は、主に弥生時代から古代までの歴史的環境についてやや詳しく概観する。

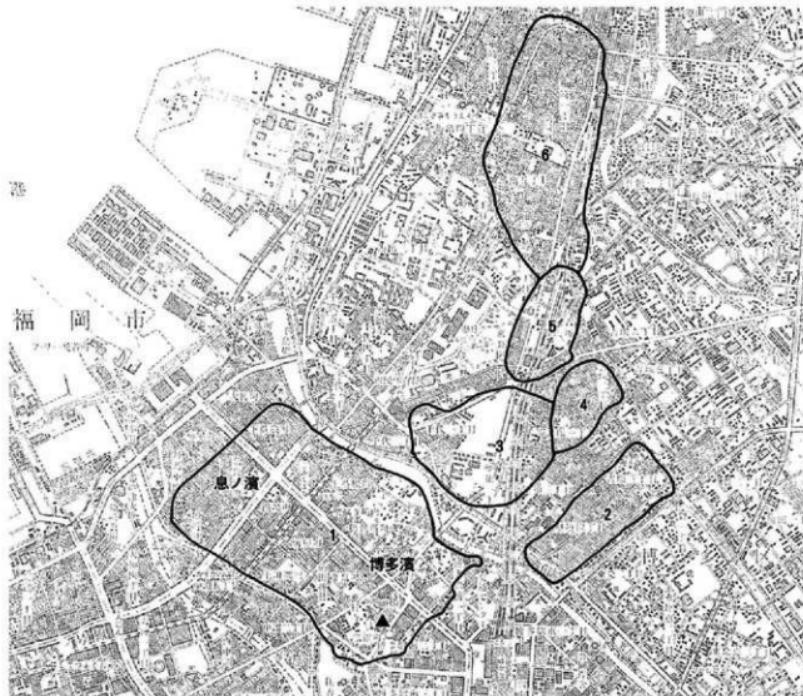


Fig. 1 博多遺跡群と周辺の遺跡（1/25,000）

- 1 博多遺跡群 2 吉塚遺跡群 3 堅柏遺跡群 4 吉塚祝町遺跡群 5 吉塚本町遺跡群 6 箱崎遺跡
（▲は166次調査地点）

博多遺跡群は、砂丘1の幾つかの地点において弥生時代前期の墓地（甕棺）や集落が散在することから始まる。弥生時代中期には、砂丘1の各所に集落や墓地が広がり、後期に継続している。出土石器の様相などから半農半漁の様相がうかがえる。中期末頃には朝鮮半島南部沿岸の勒鳥式土器も搬入され、交易の拠点としての博多の開始を象徴する。中期前半から中期末にかけては甕棺の列埋葬もみられ、一定の集落規模となった。後期初頭から後期後半にかけては、中期に存在した博多湾沿岸の砂丘上の集落の多くが消長するなかで、博多遺跡群の集落は確実に継続し、一部砂丘2の南半部に進出している。後期後半には遠隔地（瀬戸内系、山陰系、東海系など）の土器が搬入されるようになり、外来系土器が多くなる終末期以降の様相の端緒となっている。山陰系の玉作関係遺物が出土するようになるのも後期後半からである。また後期後半から古墳時代初頭の甕棺墓も点在している。弥生時代終末期には、砂丘1と砂丘2南半の一帯に構造が広がり、遺構数も多くなる。この傾向は古墳時代初頭～前期前半にピークを迎える。堅穴住居が密集する地点も多くなる。道路造構も存在し、この時期の集落の拠点化は何らかの計画のもとに營まれたと考えられる。この時期には、搬入される外来系土器がさらに増加し、楽浪系、三韓・三国（弁辰韓・馬韓）系といった朝鮮半島系土器をはじめ、西部瀬戸内系、山陰系、吉備系、巖岐系、播磨系、畿内系、東海系など東海地方以西の日本列島各地の土器が出土する。このような状況のもと、在地の土器様相が在来系から畿内系（一部山陰系）にいち早く転換している。また砂丘1中央から南半には、古墳時代初頭～前期中頃の鍛冶関係遺物が多く出土し、当時の列島では最大規模かつ最高の技術をもった鍛冶工房群が存在したとみられ、朝鮮半島から搬入された鉄素材を加工し、国内各地に交易していたと考えられる。朝鮮半島（三韓・三国）系土器は博多湾岸西側の西新町遺跡における集中には及ばないが、一定量がある。またカマドを布設する

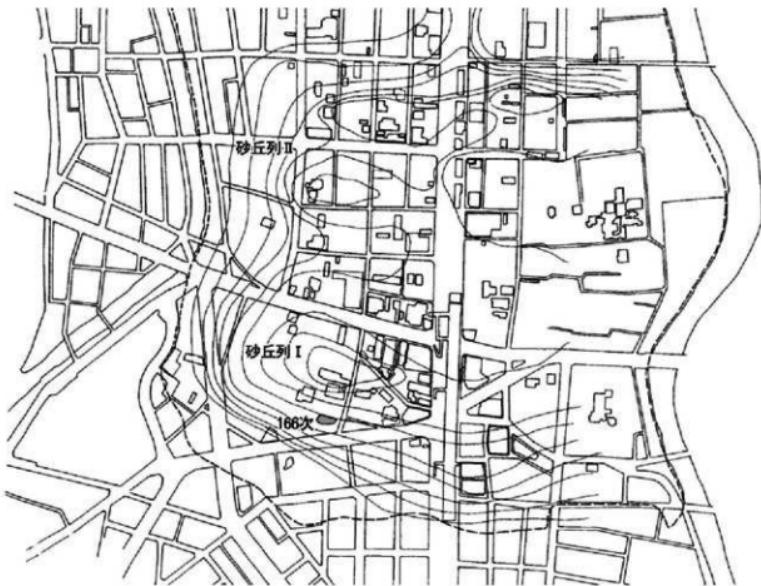


Fig. 2 博多遺跡群調査区位置図（博多演）（1/8,000）
（調査区の形状などは厳密に正しいとは限らない。）

堅穴住居も検出されている（169次）。また幾つかの地点では前期前半を主とする方形周溝墓が検出されており、砂丘1・2に散在する傾向を示している。

ところが古墳時代前期後半になると遺構・遺物は激減する。中期になると集落関係遺構はほとんどみられなくなる。代わって、中期前半の前方後円墳（博多1号墳）など、中期から後期にかけて土壙墓、木棺墓、石棺墓、小石室墓が砂丘1に分布するようになる。博多1号墳（28・31次）は全長56m以上の大型墳だが、これ以外にも中期後半～末（109次）の30m長の前方後円墳である博多2号墳や、中期中葉～後半（142次）でも円筒埴輪を伴う前方後円墳の可能性が高い埴状遺構が検出されている。142次は砂丘1の砂丘尾根西側突端にあり、この西側斜面下の171次では人物埴輪が出土し、142次の古墳に伴う可能性がある。他にも6世紀代（後期）と考えられる円筒埴輪も検出され（33次）、未発見の首長墓が存在する可能性がある。本報告の166次では、埴輪は伴わないが、大型古墳の周溝の可能性がある埴状遺構SX301がある（後期か）。今後、他にも前方後円墳を含む古墳の痕跡が検出される可能性があり、後世の遺構によりほとんど破壊・削平され、また基本的に埋没しておりその認識が難しいが、「博多古墳群」として把握する必要性が出てきたと言えるだろう。なお、博多湾沿岸では箱崎遺跡などでも中～後期の古墳が造営されていることが注意される。

博多遺跡群は、以上のように古墳時代後期のある時期までは墳墓地として利用されたが、後期後半（須恵器ⅢA～ⅢB期）頃より集落遺構が検出されるようになる。飛鳥時代前半に相当するIV期（6世紀末～7世紀中頃）には砂丘1と砂丘2南半一帯に遺構・遺物が分布し、この広がりは古墳時代前期前半の様相に近い。飛鳥時代後半に相当するV・VI期（7世紀第3～4四半期）の遺構・遺物は、砂丘2での分布は少ないが、後に正方位の官衙遺構が成立する砂丘1の中央部周囲には分布し、集落が存続するようである。飛鳥時代（592年～710年）に搬入されたと考えられる国内唯一の高勾頭土器や、この時期に遡る飛鳥・難波系（宮都系）の土師器も出土しており注目される。後の官衙施設の前身となる何らかの施設が存在した可能性もある。同時期に拠点化し、「那津官家」や初期の「筑紫大宰」の所在が想定される比恵・那珂遺跡群の外港としての位置付けが想定される。

奈良時代以降には、現在の祇園町交差点を中心とする砂丘1の中央部に、100m四方の区画溝で囲まれる官衙施設が造営されたとみられる。この内部には大型柱穴を有する掘立柱建物も検出されている。井戸の検出も多い。越州窯青磁の出土も多く、官服を飾る袴帶（帶金具・石帶）や長沙窯水注、イスラム陶器などの特殊な遺物も出土している。その官衙域の北西一帯（砂丘1北・西部～砂丘2）にも、井戸・堅穴住居・掘立柱建物・工房（鍛冶・銅）・土壙墓が点在し、袴帶も出土し、「長官」「佐」といった官職を示す文字を書いた墨書き土器も出土する。官衙に出仕する官人層の居住地ともみられる。その他、砂丘1・2の広域において、硯（円面硯・転用硯など）、皇朝十二錢、宮都系の土師器杯や権衡具などの出土もみられ、官衙を中心とする遺跡であったことは間違いない。文献に見える「鴻臚中島館」とする説も有力である。7世紀後半～末に成立した古代の外交窓口・迎賓館であり貿易港でもある筑紫館（9世紀前半より鴻臚館）は福岡城内に存在するが、博多遺跡群はこれとは入江一つしか隔てていない。鴻臚館（筑紫館）に大量に流入した初期貿易陶磁器（越州窯青磁など）は博多遺跡群でも多く出土している。交易の拠点としても存在したとみられる。一方、鴻臚館は11世紀中頃に放棄される。これを機に、対外貿易の拠点としても博多が発展することとなり、早くも11世紀後半～末までには、まず博多濱の遺構が急増し「都市化」が達成されたとみられ、12世紀前半には「博多津唐房」とも呼ばれたように中国商人も多く居住するようになった。11世紀後半以降の貿易陶磁器の出土量は他地域を圧倒しており、国際貿易都市としての博多が成立した。なお博多北半の息ノ濱は、博多濱の都市化が始まる11世紀以降に遺構が進出するが、その都市化は13世紀代以降のようである。13世

紀後半には元軍の侵攻（蒙古襲来）により博多は大きな打撃を受けるが、遺跡群北辺の息ノ浜の海浜上に石塁（元寇防塁）が築造される。さらに鎌倉幕府による鎮西探題が置かれ、博多は西国の政治の中心地にもなった。14世紀中頃以降、鎮西探題の滅亡以降には、都市の発展の中心は息ノ浜に移行し、博多濱のうちに砂丘1では遺構が激減する部分が多くなっている。

（以下、中世以降の歴史的環境については省略する。また最近の成果を含む「中世都市博多」の概説は、大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一編『中世都市・博多を掘る』（海鳥社）に詳しい。また弥生～古墳時代については、『博多76～博多遺跡群第117次調査の概要』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第667集の「博多遺跡群の地理的歴史的環境」を参照されたい。）

II. 調査の記録

1. 調査の概要

博多166次調査地点は博多濱砂丘1の南側斜面にあり、調査区内で基盤砂丘面が南西側に向かって低くなる。なお調査区周囲上面の現地表は5.2～5.4mを測る。

標高3.9～3.5m（西側が低い）で第1面を設定した。遺構面は、東側が暗褐色砂、西側は黒灰褐色砂

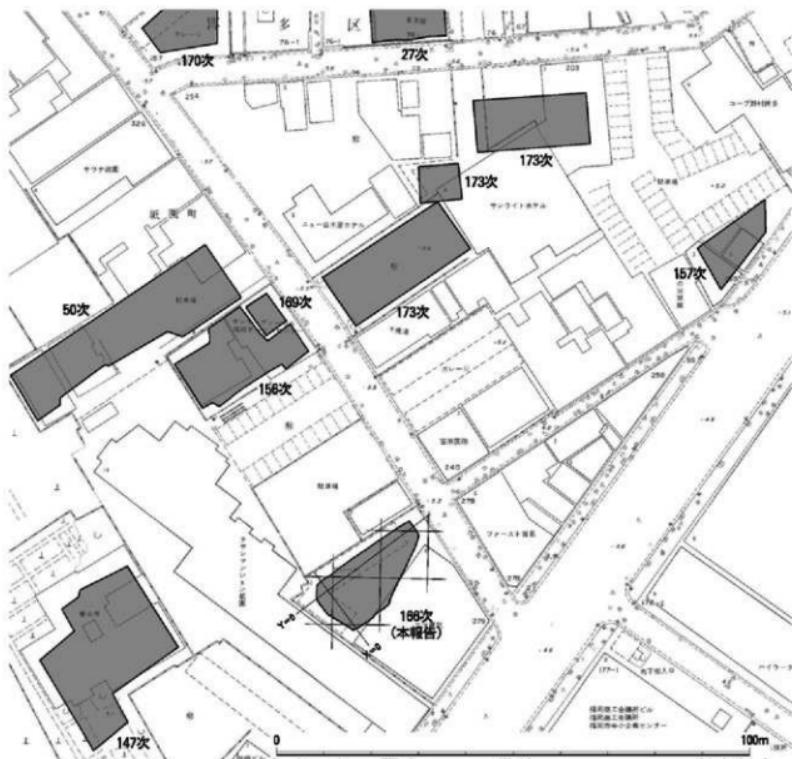


Fig. 3 博多遺跡群第166次調査区位置図 (1/1,000)

質土、一部黄灰色シルト整地層となる。土坑35（うち近世4）、井戸2、柱穴多数を検出した。一部は近世、他は11～14世紀の遺構である。次に標高3.4～3.2m（西側が低い）で第2面を設定した。遺構面は主に褐色砂、西側は暗褐色砂質土である。土坑30、柱穴多数を検出した。11～13世紀の遺構もあるが、古墳時代後期～奈良時代の遺構が多くなる。第3面は東側が標高3.2m、西側が2.5mとなる黄褐色砂～浅黄色砂上面に設定した。土坑14以上、溝状遺構3、堅穴住居3+α、柱穴多数を検出した。中央に下端幅6mの壕状落込みがあり、東側は幅1.5～2mのテラスを経て立ち上がる。第3面の遺構は古墳時代前期～後期、飛鳥～奈良時代が主体である。弥生時代の明確な遺構は無かったが、壕状落込み（SX301）の掘り下げの過程で弥生中期前半の土器群が一括して出土している。甕棺破片を含み、後に甕棺墓地があったところを破壊・造成した土砂が埋められたものであろう。

出土遺物は総量で125箱分がある。古代後期～中世前期の土師器、輸入陶磁器、瓦器、黒色土器、古墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代の土師器・須恵器、古墳時代前期の土師器、朝鮮半島系土器（瓦質・陶質）、弥生土器、各時代の土製品（土錘など）、石製品、鉄製品、銅製品（古代の權衡具など）がある。石製品には古墳時代前期と考えられる勾玉や玉作り関係遺物（碧玉管玉未製品、玉研磨用砥石）がある。鍛冶関係遺物（輪羽口、鐵津）があり、出土層位から（2面以下の包含層に多い）、大部分は古墳時代とみられる。また鉛塊や船ガラスが付着した土器・陶器片もある。

2面以下で検出した壕状落込みは大型古墳（後期か）の周溝の可能性がある。また包含層への二次的流入だが、古墳時代前期～中期とみられる朝鮮半島系土器が数点以上あり、特筆される。古墳時代後期では須恵器の鈎台付皿の出土が珍しい。銅製權や飛鳥～奈良時代の宮都系土師器もみられ、古代の官衙域の外縁部であることを示すとともに、官衙域成立の前段階を示す飛鳥時代の遺物群の多さも注意されよう。また中世の遺構・遺物は14世紀初前半までが多いが、その後は非常に少なく、博多漬砂丘列Iの他地点での傾向と一致している。

2. 調査の経過

発掘調査は平成18年（2006年）9月27・28日（以下、「9/27」のように表記）の重機による表土掘削から始まった。敷地のうち南側の約2/3は、以前に建っていたビルの基礎により地下の遺構が破壊されているとみられたので（既存ビルには地下室もあった）、その範囲を廃土置場とし、また敷地

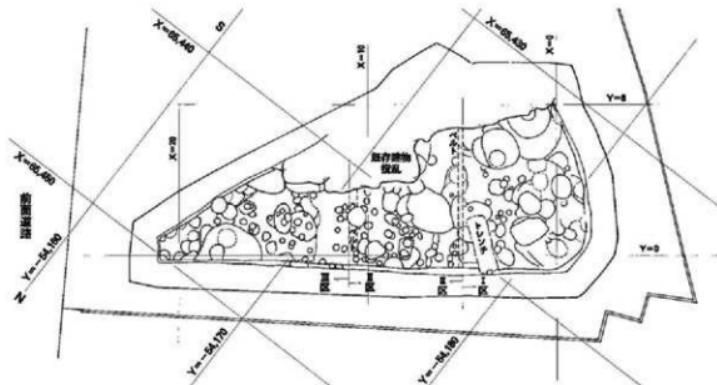


Fig. 4 博多166次調査区全体図（座標・グリッド図）(1/250)
(※遺構は第1面の概略図)

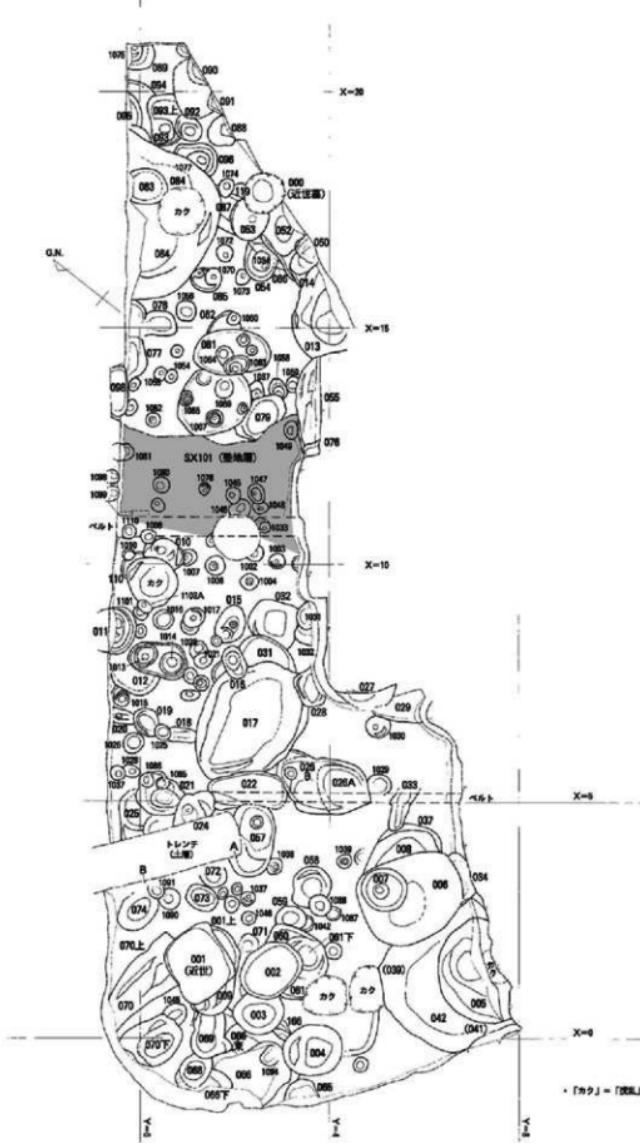


Fig. 5 第1面全体図(造構分布図)(1/100)

の約1/3にあたる調査範囲は矢板工事無しの明かり掘削法で調査を行った。このため、安全を期して sondage境界から引きを取り、また掘削法面は一定の傾斜を保持する必要があったため、掘削下端における実際の調査範囲は上面での調査範囲より小さいものとなっている。10/2から作業員を雇用し、本格的に作業を開始した。まず発掘調査機材を搬入し、現場を設営した。10/3にベルトコンベアーチーを設置し、擾乱除去と遺構検出を開始した。同時に掘削法面を保護するため斜面にシートを貼ったが、このために大量の土壌を作る必要があった。

第1面の調査は、まず近世末の龜形塚(SX000)を検出することから始まった。人骨がよく残っていたが、また調査対象とする時代(中世末まで)よりも著しく新しいことなどにより、この取り扱いについて関係者と協議を行った。その結果、この人骨は「無縫仏」の「遺体」として処理することになった。警察署の鑑識という手続きを経て遺骨を取り上げ、開発者側により寺の住職が呼ばれ10/17に読經供養し、その後火葬処理された。第1面は、確認調査(試掘調査)で想定されていたよりもやや多くの遺構が検出されたため、当初の計画よりもやや遅い作業の進行となつたが、10/24に全景写真を撮影した。その後、図面作成や個別の遺構撮影などの記録作業を行いつつ、記録が終了したところから下部の包含層を掘削し、第2面の調査に移行した。第1面は複雑な遺構の重複部分などがあり、一部の記録作業が遅れ気味となつた。そのため第2面の調査の一部は11月上旬に始まっていたが、平行して残る第1面の調査を行い、第1面の完全終了は11月中旬となっている。この間、11/5未明頃に事務所荒らし(調査事務所への侵入・盗難)の被害を受けたため、担当者が対応に追われるなどしたことも工程に若干の影響を及ぼした。

第2面の遺構はやや少なかったので作業がやや早く進行し、11/28に全景撮影を行い、11月末にその調査を終了した。11月末より、第3面の調査に移行した。第3面では、第2面下から確認した壕状遺構SX301の掘削土量が多く、また第3面の遺構もやや多かったので、12/15までとした調査期間内に本調査を終えるこ

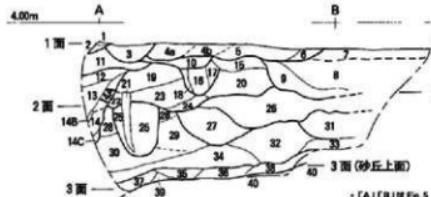


Fig. 6 試掘トレント土層図 (1/40) (PL. 2-1)

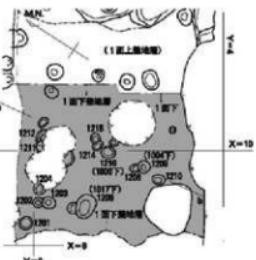


Fig. 7 II・III区间 1面下整地層
遺構分布図 (1/100)

1. 黒褐色地 + 緑色地 + くにい黄褐色地 (明るい)
2. 淡 (明) 塗膜地 + くにい黄褐色地 (明るい)
3. 黄褐色より黒(暗) 塗膜地 + 黒褐色地 + 土器地 (濃)
4. 黄褐色地 + 黒褐色地 + 黄褐色地 + 木炭土粒少し、4人層剥離 + 土器地 (明)
5. 黑褐色地 + 黑褐色地 + 黑褐色地 (明)
6. 黑褐色地少し、淡 (明) 黒
7. 4 日より上塗地、黒褐色地 + くにい黄褐色地、灰・灰土粒むずかず、4 A 層
8. 黄褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 黑褐色地 (明)
9. 黄褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 黄褐色地 (明) より黒 (暗) 11
10. 黑褐色地 + くにい黄褐色地 (くにい黄褐色地少し)
11. 黒褐色地 (明) の遺構
12. 黒褐色地 + 土器地 + 墓塗地 (瓦器地)、しまり
13. 黑褐色地 + 土器地 + 木炭土粒
14. ややくまびるある黒褐色地 (くにい黄褐色地) (SX202-1層)、下層骨合
15. SX202-4 (やや暗い) 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地)若干 平
SX202-5 = 3層、褐色地 + くにい黄褐色地 (少) + 黄褐色
16. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) (少)
17. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) 12層 (か)
18. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地)、下層骨合上、しまり (やや)あり、灰・運搬円筒形、埋藏地點少しある
19. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
20. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
21. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 多い
22. ややくまびるある黒褐色地 (くにい黄褐色地) + 黄褐色地 (少)
23. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) (少)
24. よじり少なく (運搬円筒形ありなし)、黒褐色地 (+ 黑褐色地)
25. ややくまびる 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 黄褐色地 (くにい黄褐色地) 13層 (か) 埋藏地點少しある
26. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
27. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
28. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
29. 黑褐色地 (明) (4)、くにい前削痕地 (黒褐色地) + 黑褐色地 (少)
30. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
31. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
32. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
33. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
34. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
35. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
36. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
37. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
38. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
39. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片
40. 黑褐色地 + 黑褐色地 (くにい黄褐色地) + 土器片

表1. 試掘トレント(西側)土層(Fig. 6)注記

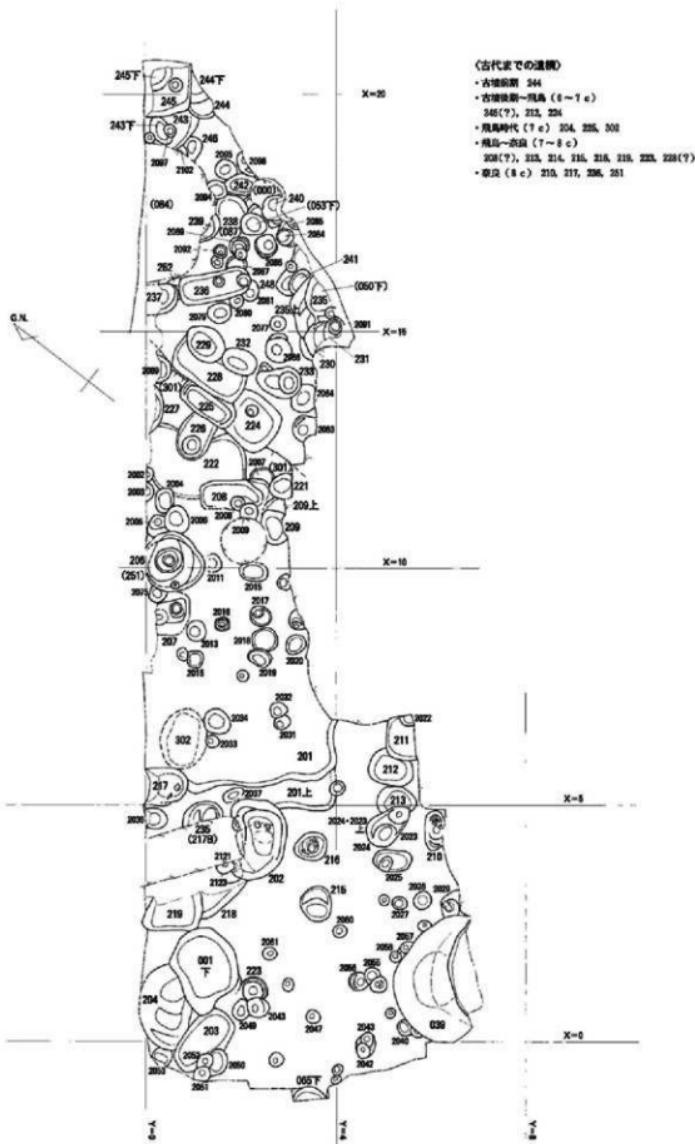


Fig. 8 第2面全体図（遺構分布図）（1/100）

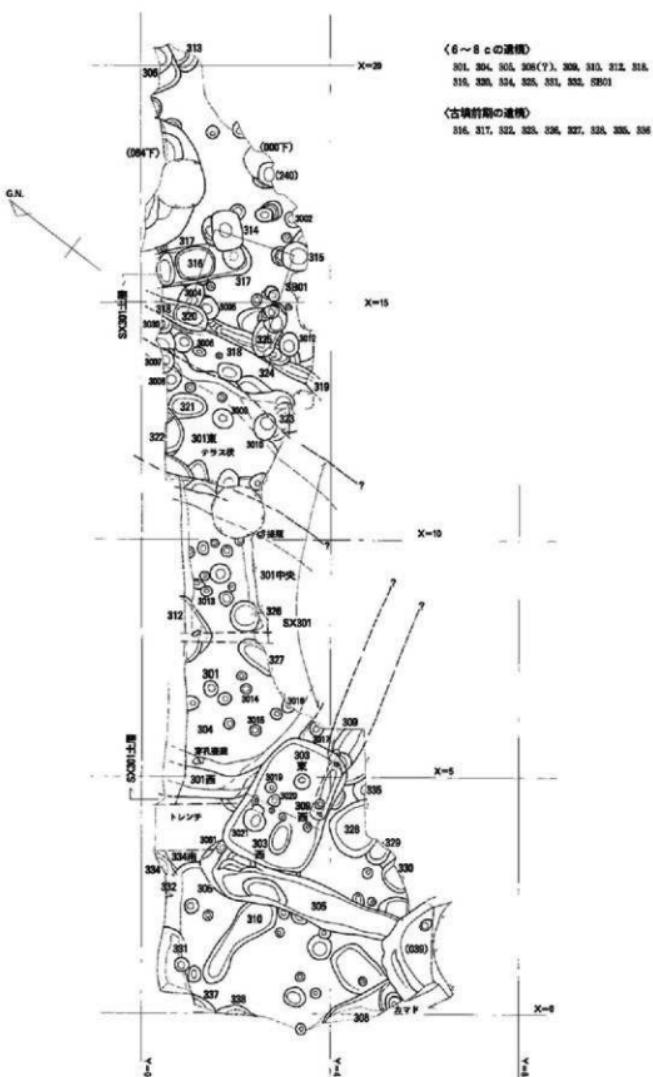


Fig. 9 第3面全体図(造構分布図)(1/100)

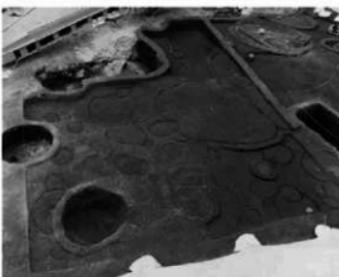


Ph. 1 SK000近世甕棺人骨出土状況（北から）
とが困難な状況となった。そのため、委託者である株式会社高松組と調査工程について協議を行ったが、発掘調査に対するご理解を得ることができ、調査期間の若干の延伸についての了承を得ることができた。12/11には第3面の全景を撮影した。その後、下部造構の完掘や、SX301を含む調査区壁の土層断面の記録を最後に行い、12/14～18にかけて調査区を埋め戻し、調査機材を撤収して平成18年12月18日に本調査を終了した。

なお整理作業と報告書作成は、当初の委託契約では平成19年度に行うこととしていたが、調査担当者の同年度の業務量が過多と見込まれたため、十分な整理報告をする余裕がないと判断し、整理報告の年度延長について株式会社高松組に申し入れた。協議の結果、委託契約の一部を変更し、整理報告は平成20年度に行い、平成20年度末に報告書を刊行することになった。



Ph. 2 第1面Ⅰ区造構検出状況（南西から）



Ph. 3 第1面Ⅱ区造構検出状況（北から）

3. 第1面の調査 (Fig. 5, PL. 5, PL. 6-1)

第1面は、確認（試掘）調査により中世の造構面があると推定されたレベルを鍵として広げた造構面である。ただし実際には、試掘トレンチより東側は中世の造構・包含層をより浅い深度で確認した。調査区北東端ではGL-150cm前後の標高3.9mで、調査区南西端ではGL-170cm、標高3.5mで最初の造構検出面とした（東西で地表面標高が異なる）。なお、これら造構検出面は任意の設定であり、必ずしも特定の時代の生活面や整地面を示すものではない。調査区東側では砂質気味の包含層覆土で、黒色気味シルト質の造構覆土が比較的分かりやすかったが（PL. 1-1）、調査区中央から西（南西）側にかけては、黒灰褐色気味シルト質の包含層覆土であり、造構覆土が分かりにくかった（Ph. 2・3）。そのため、中央から東側は当初の検出面から包含層をやや下げた後に、造構検出を行った。包含層堆積の厚い東側は何處かに分けて下げた後に造構を検出し、造構検出がしやすい暗褐色沙混入層まで下げている（東側検出面土層は試掘トレンチ土層Fig. 7, PL. 2-1 参照）。出土遺物で、「1面上①」「1面上②」「1面上③」とするのは、この過程で包含層を下げた時の順番を示す（①がより上層、③がより下層）。

調査区中央やや東側では、黄灰色シルト主体の整地層SX101が検出されたが（Fig. 5 アミカケ部分, PL. 1-2）、この広がりは途中で不明となり、その性格も把握できなかった。この下部にも（1面下）、やや西側にズレて（X = 8～11の範囲）やはり同様の整地層を検出したが（Fig. 6, PL. 1-3）、これ

も狭い範囲での確認にとどまり、これを広げてさらに遺構面を設定することはしていない。

以下、諸制約から各遺構の詳しい報告はできないので、主要な遺構についてのみ簡単に報告する。

SX000 (Ph. 1) は、Ⅲ区(グリッド・座標は Fig. 4 参照)で検出した近世掘立柱。肥前系陶器の大甕を棺とする。18世紀後半～19世紀前半か。当地には江戸期に「東林寺」という寺があり、その寺域内墓地の改葬漏れであろう。

SK055は、Ⅲ区南検出の土坑。2.3m長以上。南側は搅乱で破壊。南西側は**SK076**(近世?)に切られ、北東側は**SK013**を切る。土層から複数遺構重複の可能性。出土遺物にはFig.31-34～36などがある(以下、「Fig.」を省略)。12世紀後半か。

SK014・050・052(Fig.10右・11左 Ph. 4)は、重複する遺構。014が新しいが、050と052の新旧

SK055土層記述

1. 黒褐色・黒灰褐色シルト・砂質土+暗褐色砂(1A) +暗褐色シルトプロトク・粒子少疊+灰粒・灰土粒・土層粒子や多く、しまりあり
- 1B. 黑褐色・黑灰褐色シルト・砂質土+暗褐色砂(1A)より多く混じていない、しまりあり
- 1C. 1A層にむしろしない(混じない)。
- 1D. 黑褐色・黑灰褐色シルト・砂質土+暗褐色砂(1A)より多く混じていない、しまりあり
2. 黑褐色・灰褐色・灰褐色シルト+暗褐色砂・粘土
3. 暗褐色(灰褐色砂) 砂(1C)に混じる暗褐色シルト(1D) +灰褐色砂(1C)と混じる多くの骨片
4. 黑褐色(灰褐色砂) シルト・暗褐色砂・灰褐色シルト・粒子(1C)
5. 黑褐色・暗褐色シルト・土(やや白色あり)、遺物なし。細胞砂・暗褐色砂無く、灰褐色シルト粒子少疊
6. 黑褐色砂質シルト土+暗褐色砂(1C)より多い細胞砂(1D)以上)、灰粒・灰褐色シルト・粒子なし。やや骨片あり
7. 黑褐色・暗褐色砂、しまりややあり、暗褐色砂(1D)無
- (5・7・丁層はSYR系の土色—中層)
- 8A. 黑褐色砂(1C)に混じる暗褐色細胞砂(1D) (粒粒わずか)、やや白さあり
- 8B. 黑褐色砂(1C)に混じる暗褐色細胞砂(1D) (粒粒わずか)、やや白さあり
- (8A・8B・丁層はSYR系の土色—中層)
9. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
10. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
11. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
12. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
13. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
14. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
15. 黑褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
16. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
17. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
18. 黑褐色・暗褐色シルト粒子 (1D・丁層より埋入)
19. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
20. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
21. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
22. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
23. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
24. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
25. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層
26. 暗褐色砂(1C)に混じる暗褐色砂(1D) +細胞砂(1D) (粒粒わずか)、丁層

表2. SK055はか土層 (Fig.10) 注記

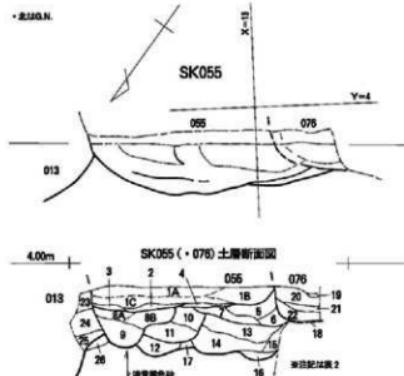


Fig.10 SK055, SK014・052実測図 (1/40)

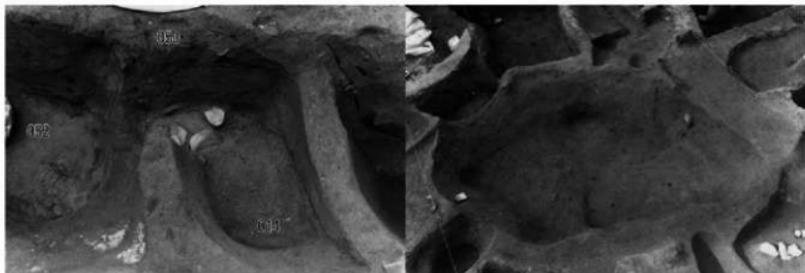
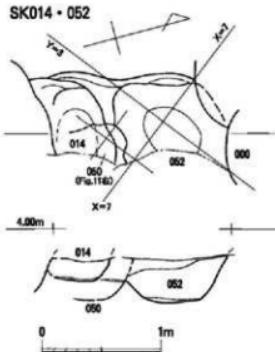


Fig. 4 SK050, SK014掘削状況 (北西から)

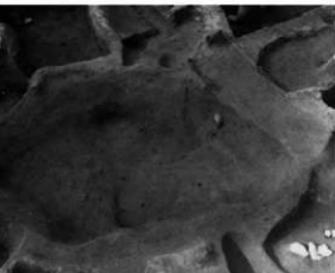


Fig. 5 SK017完掘状況 (北から)

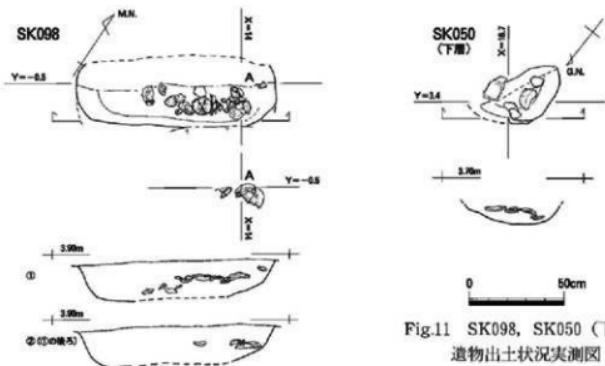


Fig.11 SK098, SK050 (下層)
遺物出土状況実測図 (1/25)

は微妙。3造構の上部から31-42などが、052からは29-21、31-43~46などが、050からは31-40・41や下層で瓦類などが出土した。12世紀代。SK098 (Fig.11左 PL. 8-4) は、Ⅲ区北壁廻で検出。土師器杯が一括で出土した細長い土坑で、あるいは土壇墓か。32-23~33、42などが出土。13世紀後半~14世紀前半。SE084 (Fig.12左上 PL. 8-3) は、深度と土坑の径から井戸と考えるが、井戸側部分は調査区壁外で不明。32-36~41、43-1・2などが出土。12世紀後半~13世紀前半。その他、7・8世紀代の畿内系暗文土師器片が複数出土している。SK032 (Fig.12右上) は、径110cmの土坑。31-27など瓦質土器片が出土。14世紀代。SK026 (Fig.12右中 Ph.26) は、二つの土坑の重複か。31-28-29や土師器丸底壺が出土。12世紀前半。SK008 (Fig.12左下) は、SK006に切られる。31-6、29-22や土師器壺皿から12世紀後半。SD033 (Fig.12左下) は、



Ph. 6 SK013上層遺物出土状況 (北から)

Ph. 8 SK026完掘状況 (南西から)



Ph. 7 SK013完掘・土層断面状況 (北から) Ph. 9 SE005(奥), SE039(042)(手前)掘削状況 (北西から)

SK008に切られる溝。東側は途中で不明となる。31-32・33などを出土。土師器杯にヘラ切・糸切底が混在し、12世紀中頃。SK(SP)010 (Fig.12右下, PL. 8-6) は、土坑としたが柱穴か。31-12-14などが出土し、12世紀後半～13世紀前半。カキ類など貝類主体の動物遺存体が多く出土。SE005 (Fig.13左上, Ph. 9) は、I区南端で検出し完掘できていない。深度と井戸側痕跡の落込みから井戸であろう。29-6～9, 31-2～5などが出土し、14世紀代。7・8世紀の土器が多く混入し、馬齒も出土した。SE (SK)039 (Fig.13右上, Ph. 9・10) は、SE005に切られる大型土坑。井戸側は不明だが、深度と径の大きさから井戸であろう。西半をSK042としたが同一遺構である。32-1～12, 43-3・10, 44-10などが出土し、口禿白磁皿と土師器杯から13世紀後半～末。その他、馬齒が出土。SK004 (Fig.13左中) は I区南西の浅い土坑。上層に近世の墨書き陶器鉢があるが、下層に瓦器などがあり12世紀代だろう。魚骨も出土。SK003 (Fig.13中) は、SK002に切られる浅い土坑。下層は糸切・ヘラ切底の土師皿があり、上層は糸切底のみとなる。12世紀中頃～後半。SK057 (Fig.13左下) は、試掘トレンチ南東側の浅い土坑。31-47・48などを出土。土師器杯はヘラ切底で、12世紀前半。SK006・007 (Fig.13右下) は、I区東側で検出。上層を掘削後にSK007を検出。2遺構上層からは29-11～15, 31-10・11などが、006からは29-10, 31-7・8, 43-4などが、007からは29-16, 31-9などが出土した。上層は13世紀後半、

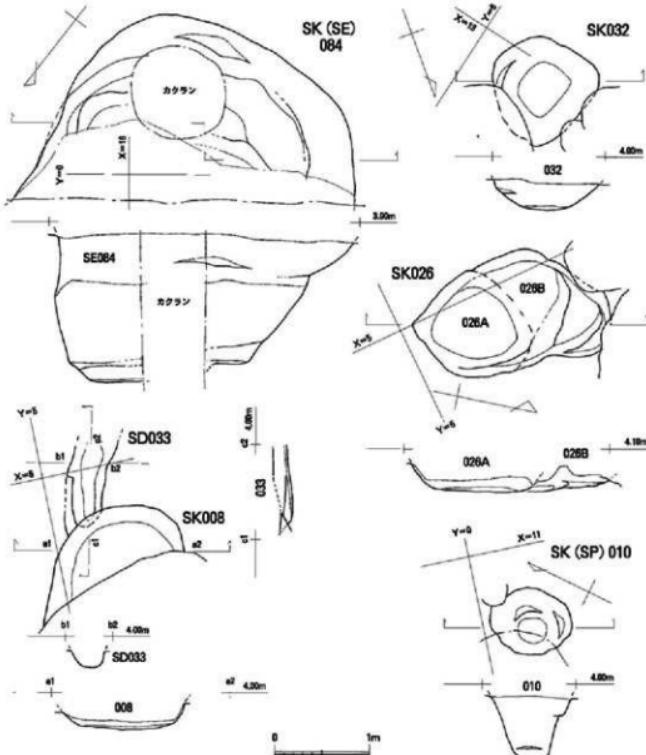


Fig.12 第1面遺構実測図(1)(SK084ほか)(1/50)

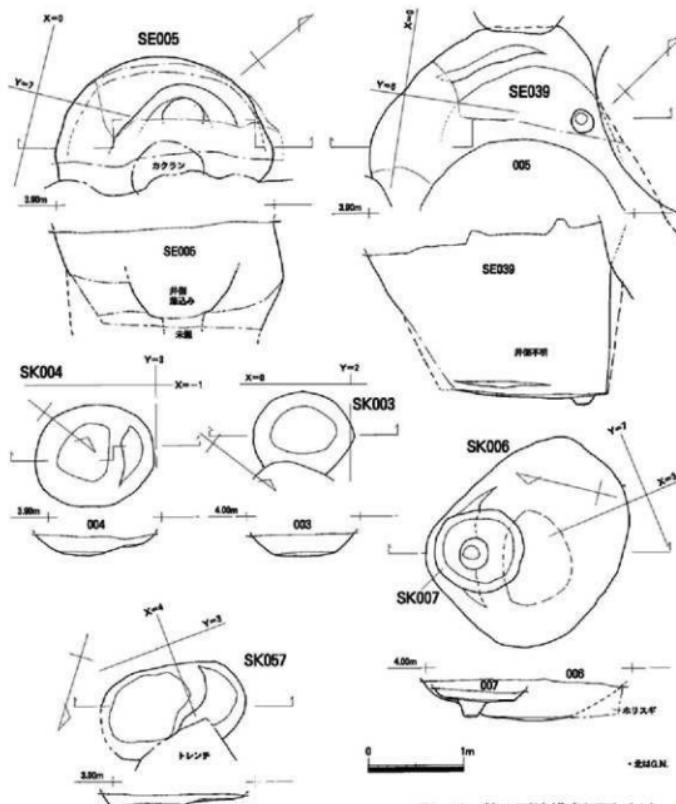
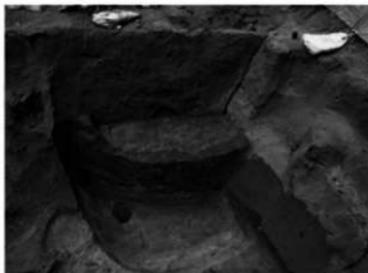


Fig.13 第1面造構実測図(2)
(SE005・039ほか) (1/50)

006-007は13世紀代であろう。SK013(Fig.14左上, Ph. 6・7)はⅢ区南壁際検出の径200cm以上の土坑。多量の遺物が出土し、29-1～5, 30-1～28などがある。13世紀前半～後半。SK093(Fig.14右上)は、断面形から柱穴か。ヘラ切底土器器皿があり12世紀中頃以前だが、7世紀の土器が多く出土。SK002(Fig.14左中, PL. 8-1)はI区中央検出の浅い土坑。28-13-17などのほか瓦壇を出土。糸切底の土器器皿と白磁から12世紀後半か。SK011(Fig.14左下)は、断面形から柱穴か。29-23, 31-15などのほか、上層で14世紀代の口禿白磁碗、瓦質土器を出土するが、下層は糸切・ヘラ切底の土器器皿が混在して出土。12世紀中頃だろ



Ph.10 SE039(042)第3面以下完掘状況(北西から)

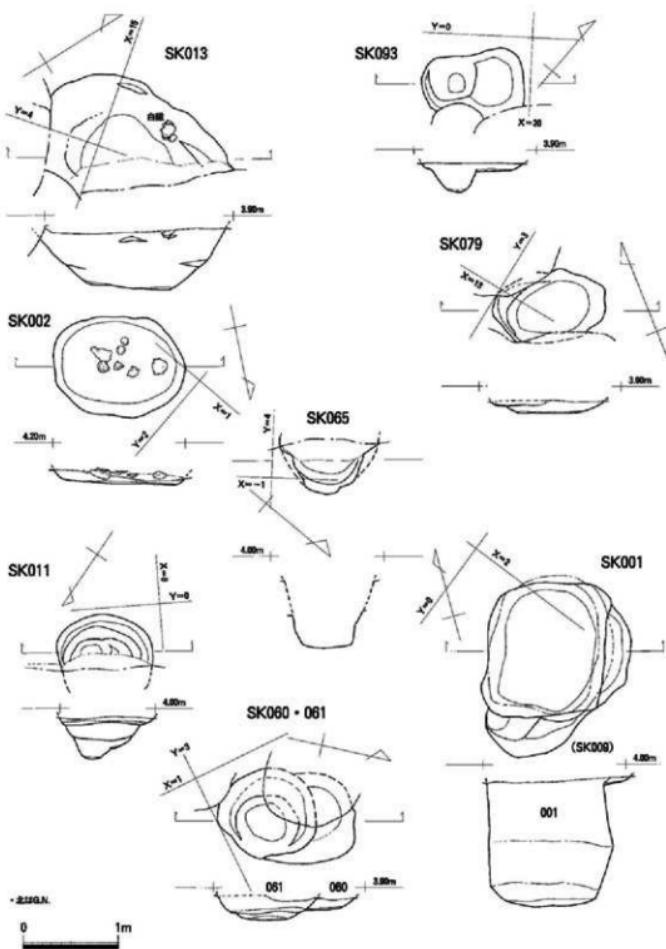


Fig.14 第1面造構実測図(3)(SK013, SK002ほか)(1/50)

う。SK065(Fig.14中)は、I区南東壁際で検出。白磁、糸切底の土師器皿、龍泉系青磁あり。SK079(Fig.14右中)は、整地層SX101に切られる浅い土坑。転用觀須恵器杯蓋32-21のほか、瓦器片などがあり、12世紀代。SK001(Fig.14右下)は、I区西側で検出した125×140cm略方形の深い土坑。井戸ではないようである。上層で近世の平瓦・丸瓦が多く出土した。30-1, 28-1~9・18・19などが出土し、近世後期の18世紀後半~19世紀前半。その他、古墳時代から古代・中世までの遺物の混入も多い。

SK009は001と重複ないし共存する近世土坑。31-16・17などが出土し、近世後期。SK060・061(Fig.14中下)は、SK002に切られる土坑。061が060を切る。061は平面がさらに西側に広がる可能性が

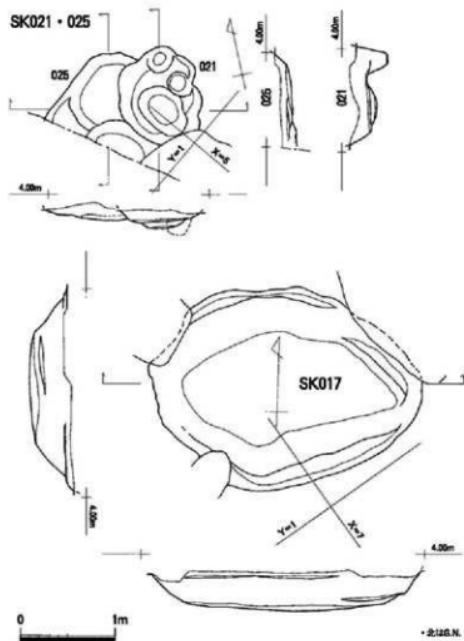


Fig.15 第1面遺構実測図(4) (SK021・025, SK017) (1/50)

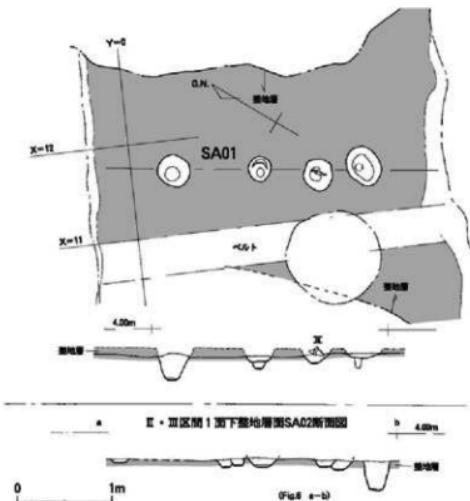


Fig.16 III区第1面整地層上SA01実測図、II・III区間1面下整地層SA02断面図 (1/50)

ある(Fig.5)。061からは31-49～51などが出土し、他に土師器皿は糸切・ヘラ切底が混在し12世紀中頃～後半。060には瓦器・糸切底土師器あり。061の時期と隔たりはない。SK021・025(Fig.15上)は、試掘トレンチ北側で検出。021が025を切る。025から31-31などが出土し、021から糸切底土師皿、龍泉系青磁などが出土している。いずれも13世紀後半頃。SK017(Fig.15下PL.8-5, Ph.5)は、220×290cmの大型土坑。遺物が多量に出土。31-18～25, 29-17～19などがあり、12世紀後半～13世紀前半であろう。SA01(Fig.16上, PL.1-2)は、II区東～III区西の整地層(前述)上面で確認した柱穴列。瓦片が落ち込んだ柱穴もある。対応する建物は不明。層位から13～14世紀か。SA02(Fig.16下; Fig.6, PL.1-3)は、II区東側で1面から2面へ掘り下げる過程で確認した整地層(前述)の上面で検出した柱穴列。上面包含層中から39-1～3, 43-12などが出土。12世紀前半後の建物区画に関わるものであろうが、対応する建物などは不明。SK066・070(Fig.17, PL.8-2)などは、I区西側で確認した複数の遺構群である。覆土の区別が難しく、新旧関係は不明瞭である。多量の遺物が出土。060・070の上面確認時包含層および上層部分から29-25～33, 32-12などが出土し、SK066東(066以前の別遺構か)から32-16～18などが、070から29-24, 32-14～15などが出土した。11世紀後半～12世紀前半が多く、糸切底の土師器はほぼ含まれない。10～11世紀の遺物も多く、古墳時代～古代の遺物も少くない。SK069は11世紀の土師器壺・楕が出土している。

4. 第2面の調査 (Fig.8, PL.1-5, PL.6-2)

主に褐色砂上面の遺構面である。一部に中世前期があるが、他は6~8世紀の遺構が主体である。SK224 (Fig.18左) は、SK225・228に切られる。33-29など、6~7世紀の土器がある。SK(SP)241 (Fig.18中央) は、SK235に切られる。33-30などが出土し、土師器壺から12世紀後半~13世紀前半か。SK230・235 (Fig.18右) などは重複し、230が新しく、235がこれに切られ、下層の231が古い。1面SK013の下部にあたる。235からは33-28が出土し、瓦質状だが土師器か。他に白磁などがある。230からは33-31などが出土し、13世紀前半頃か。

SK202 (Fig.19, PL.2-3) は、試掘レンチ南側検出の土坑。多量の遺物があり、33-3~17などが出土した。11世紀後半~12世紀初頭。SK(SP)210 (Fig.20, PL.8-7) は、I区南側で検出した。

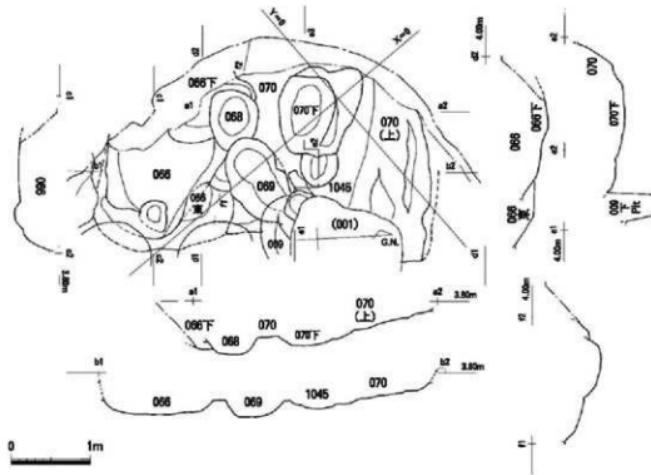


Fig.17 第1面SX066, SX070ほか実測図 (1/60)

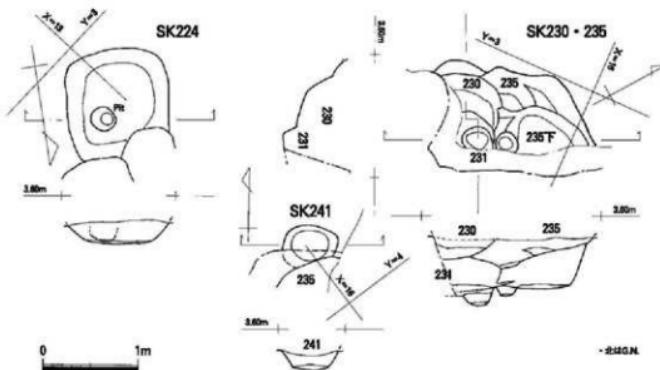


Fig.18 第2面遺構実測図 (1) (SK224, SK230+235ほか) (1/50)

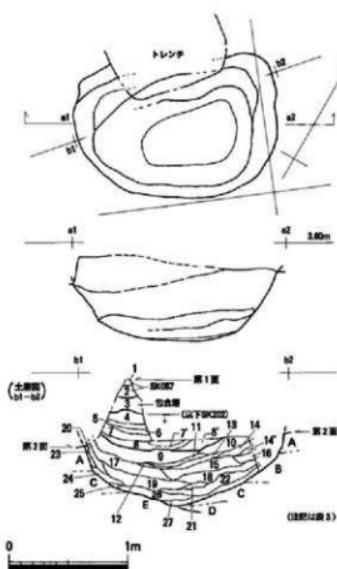


Fig.19 SK202実測図・土層図 (1/40)

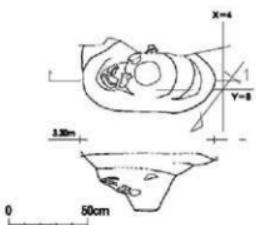


Fig.20 SK210実測図 (1/30)

I区2面SK202土層

1. 黒褐色色灰粘土。D1より薄い、しまり・粒度あり。17層より過剰含水。
2. 明褐色+にかい黒褐色土。A1より。
3. 明褐色土(<やや重い褐色砂)、ややしまりあり。5mmの大粒の含水粒。
4. 3層よりやや暗い明褐色沙+にかい黒褐色砂20~20%。
5. にかい黒褐色沙(黒褐色沙)+明褐色沙20~20%。
6. ややしまりのある明褐色沙20%+にかい黒褐色沙(にかい黒褐色)。
7. 5層とは同じじ。4~8層より弱い(にかい黒褐色)。
8. 「7」層に近い「5」層までは。
9. ややしまる明褐色沙(やや暗い褐色沙)+にかい褐色砂。
10. よりしまる、しまりやや甘い。
11. 2層よりしまる甘い(黄褐色)。にかい黒褐色沙+明褐色沙。
12. 黑褐色沙(2層)。にかい黒褐色沙。
13. 黄褐色沙(1層)。にかい黒褐色沙。
14. 11層の(にかい) 黄褐色沙に埋められた褐色沙入り。
15. 17層よりが、遺物が多く、やや軟らかく、明褐色砂。
16. 15層にかい黒褐色沙。
17. 明褐色沙+粘土質。しまり・粒度あり。無土粒少い。無機少々含む。遺物の小片含む。
18. 13層とは同じじ。遺物多く多い。黒い。

表3. SK202土層 (Fig.19) 注記

大型柱穴か。33-23-24など、奈良時代（8世紀）の遺物が出土している。SK(SC?)245 (Fig.21左 PL.8-8) は、III区北東端の方形土坑、竪穴住居の隅角か。

鉈台付鼎 (Fig.34. Ph.15~18) が上層で出土した (Ph.11)。台付鼎自体、九州では稀であり、東海地方などからの搬入の可能性がある。頭部より上が不明だが、6世紀後半～末のものか。SK204 (Fig.21中) はI区西端検出の楕円形土坑。33-2などがあり、上層で7~8世紀の須恵器・土師器が多く出土。下層は7世紀の土器が出土した。SX302 (Fig.21右 PL.3-3) は、II区西側で2面から3面に下げる過程で検出し土器窓。弥生時代中期前半～中頃の土器群が一括して出土し、その下部に41-4・5の須恵器大甌が出土した（7世紀前半）。この範囲の東側に近接して40-6～8の甌棺が出土しており、先行して存在した甌棺墓地と付随する祭祀遺構が破壊され、その土砂が再堆積

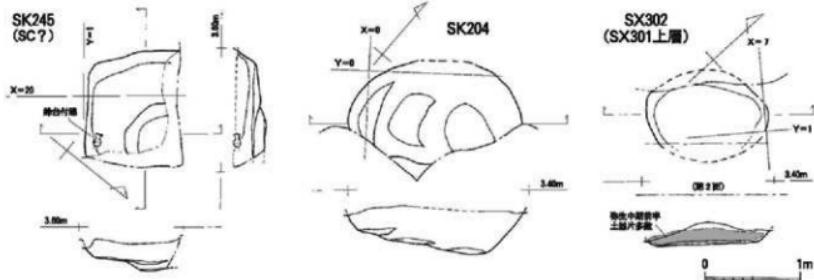


Fig.21 第2面造構実測図 (2) (SK245, SK204ほか) (1/50)

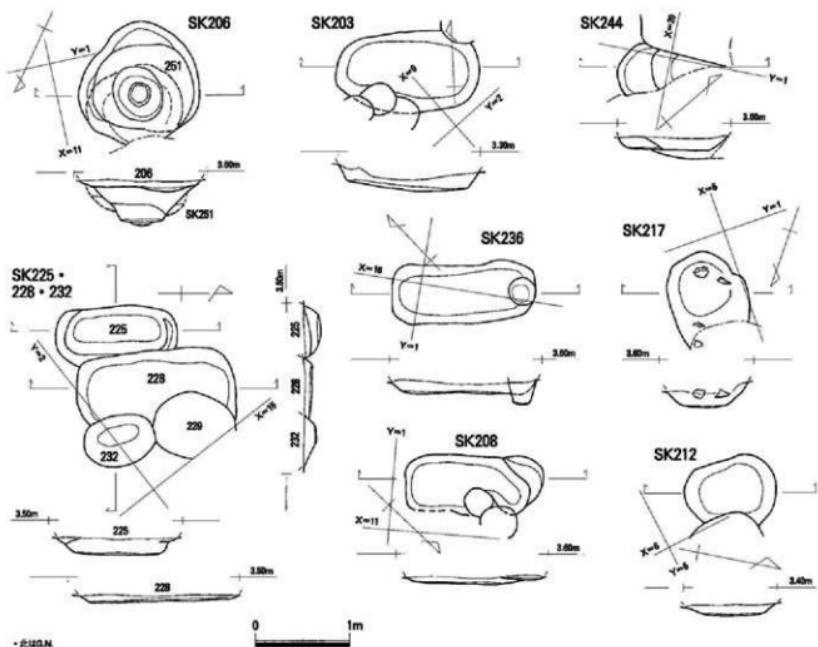
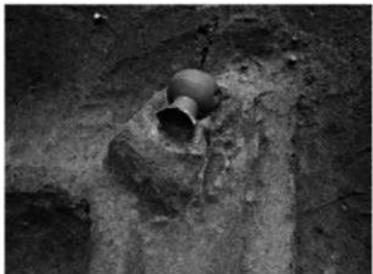


Fig.22 第2面遺構実測図 (3) (SK206, SK203ほか) (1 / 50)



Ph.11 SK245鈴台付壺出土状況 (南西から)
したものであろう。SX301 (後述) の埋没過程の
凹みにおける土器窪である。SK206 (Fig.22左上)
は、径130cm 33~18~20のほか糸切底土師皿があり、
12世紀後半。下層SK251は8世紀の土器があり、
牛歯を出土。SK203 (Fig.22中上) は204を切る。
225・228などと類似し土壤墓か。7~8世紀
の須恵器・土師器・赤焼土器を出土。SK244



Ph.12 SX301掘削状況, II区 (SX301下部)
遺構検出状況 (南西から)

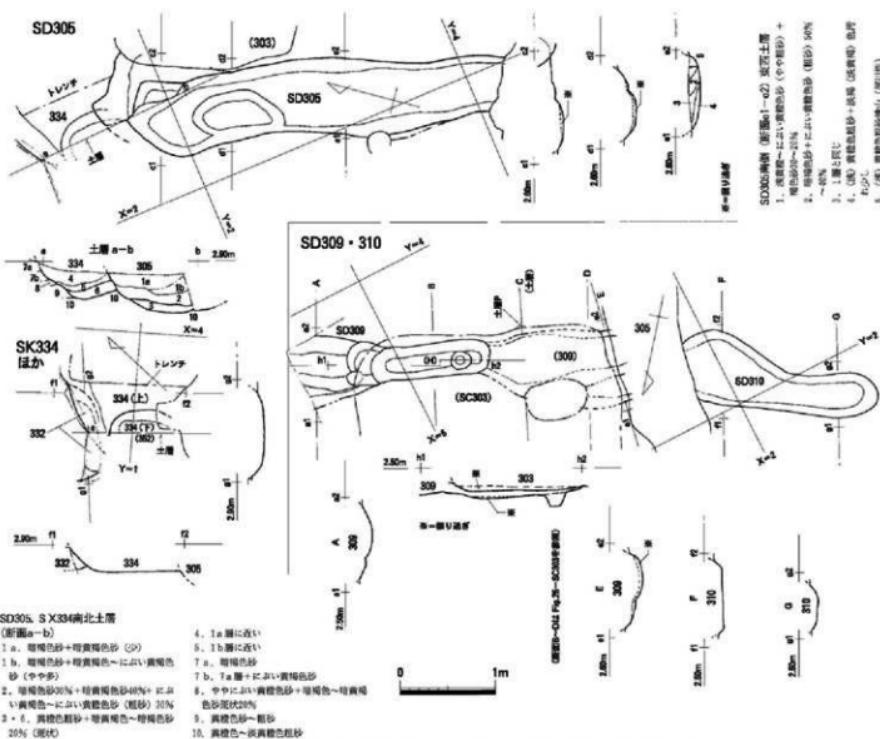


Fig.23 第3面造構実測図(1) (SD305, SD309・310ほか) (1/50)

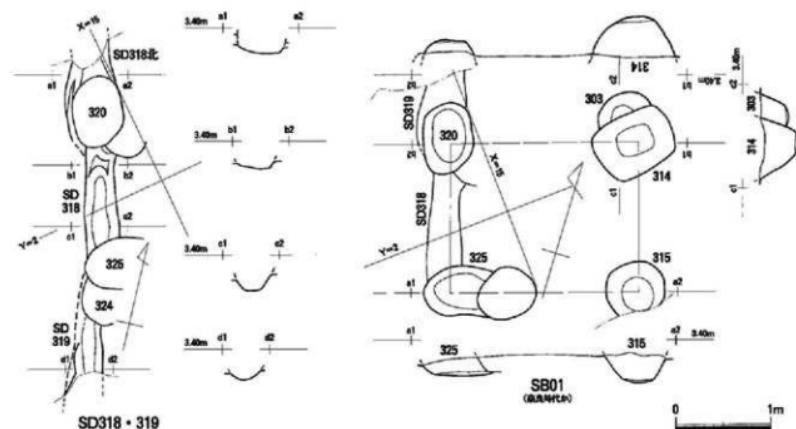


Fig.24 第3面造構実測図(2) (SD318・319, SB01) (1/50)

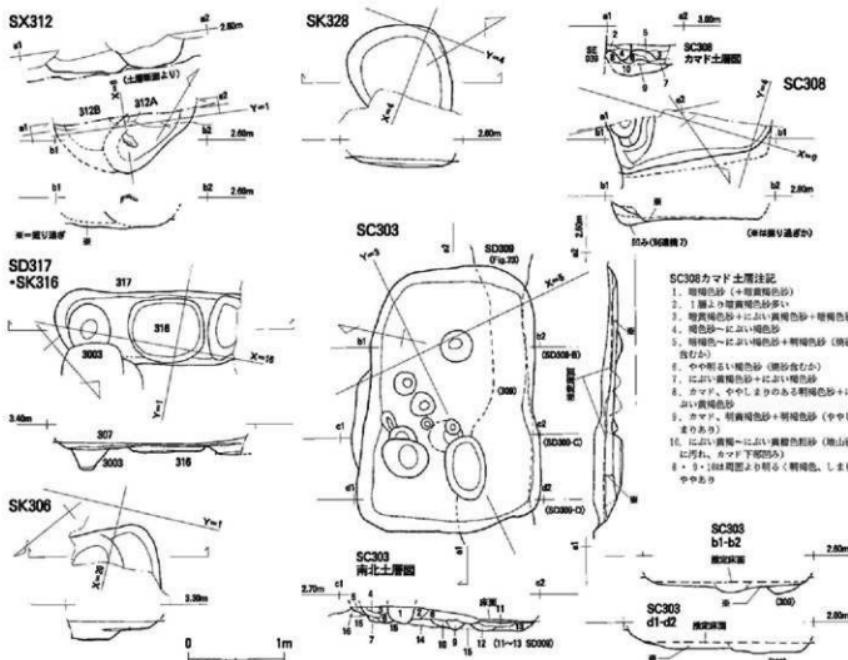


Fig.25 第3面造構実測図 (3) (SX312, SC303・308ほか) (1/50)

SC303南北土層

1. 暗褐色+暗褐色色沙+にい黄褐色沙。2. 黒より暗褐色偏い。
2. やや青い暗褐色沙(暗影)+暗褐色+暗褐色。底谷で、まわりあり。カマドではないかも。砂の跡れか。
3. 1よりやや明るい。にい黄褐色+にい黄褐色色沙または暗褐色沙。4. 黑より暗い。にい黄褐色色沙+にい黄褐色。
5. にい(暗) 黄褐色+にい黄褐色沙(少)。
6. 黄褐色+にい黄褐色沙+暗褐色沙(少)。
7. 明褐色+にい黄褐色沙(少) +にい黄褐色。
8. 2層に近い。にい(暗) 暗褐色+暗褐色。
9. 暗褐色色沙+にい黄褐色沙。
10. 黒より暗い。暗褐色色沙+暗褐色沙(少) +にい黄褐色粗砂(少)。
11. 暗褐色色沙+にい黄褐色粗砂(少)。
12. 1端とははる同じだ暗褐色色沙を40%含む。
13. 暗褐色色沙+暗褐色+暗褐色を少し混じて含む。
14. にい黄褐色沙+暗褐色沙+暗褐色沙。
15. 淡褐色色沙。
16. 1層より細かい黄褐色+淡褐色。

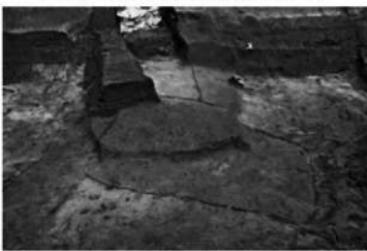
表4. SC303南北土層 (Fig.25) 注記

(Fig.22右上) は245に切られ、古墳時代前期の可能性。

SK225・228・232 (Fig.22左下) などは、下部のSX301の上端に沿う形で重複する土坑。225・228はプランから土壙墓であろうか。232からは、転用硯の33-21のほかに龍泉系青磁も出土し、12世紀代で他より新しい。225はIV期新相～V期の須恵器がある。SK236 (Fig.22中央) は、浅い長方形土坑。8世紀の須恵器杯蓋がある。土壙墓か。SK208 (Fig.22中下) は236に近い方位をで、類似する土



Ph.13 SD305土層断面状況 (南から)



Ph.14 SC303(中央), SD305(左), SD304(奥) 検出状況(南から)

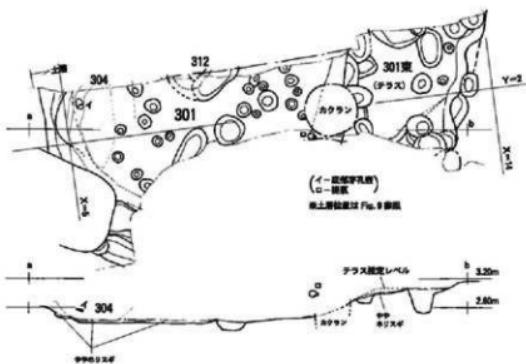


Fig.26 SX301大溝(古墳周溝?)実測図(1/100)

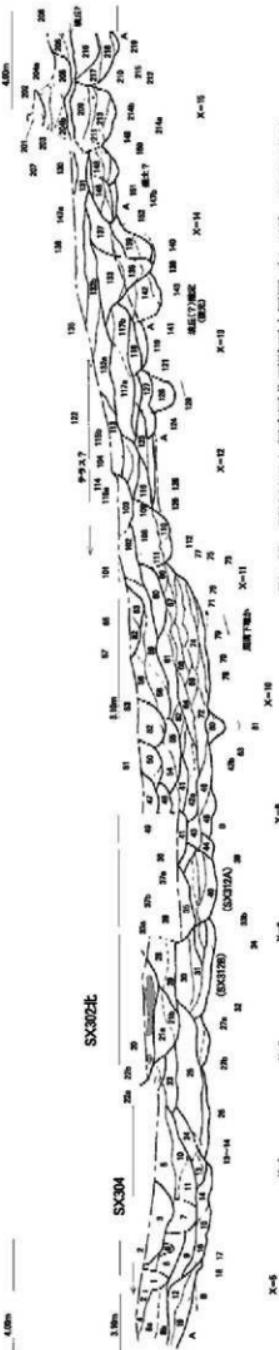
坑。古式土器があるが混入か。SK217(Fig.22右中)は、80×100cm前後の土坑。33-26-27などが出土し、奈良時代。SK212(Fig.22右下)はII区南端検出の土坑。33-39-40など、6世紀後半～末の須恵器・赤焼土器がある。7～8世紀の遺構は他にもあるが省略する。

5. 第3面の調査 (Fig.9, PL.1-6, PL.7)

基盤砂丘面での調査である。奈良時代以前の遺構を検出した。

SX301は、当初は自然の傾斜と考えたが、西側で立ち上がり、人為遺構と判断した。この底面でも遺構を検出した。

SD305 (Fig.23上, PL.2-7, Ph.13-14) は、略南北方向の溝。SD310とSX334を切る。IV～V期の須恵器がある。SX334 (Fig.23左, PL.2-7) は、プランが不明確な土坑。古墳時代前期か。SD309・310 (Fig.23右下) は、おそらくは一連の溝。309の埋没後にSC303がある。略東西に走行し、SX301の南辺と接すると予想される。309には土器の壺・瓶・カマド片や須恵大甕片があり、6世紀～7世紀初頭であろう。SD318-319 (Fig.24左) 検出時PL.2-4) は、一連の溝。SX301上端線の東側におよそ沿うが、やや西に振れ、SD305の方位に近い。318には7世紀後半～8世紀の畿内系暗文土器鉢(环)の破片がある。SB01 (Fig.24右) は、SK (SP) 320・314(303?)・315・325から推定した建物。314・315は古式土器が出土するが、320に8世紀の須恵器環があり、他の遺構との関係からも奈良時代であろう。SX312 (Fig.25左上, PL.2-1, PL.3-2) はSX301下層検出の土坑。北西側壁面の土層からより上部から掘り込みが認められ、二つの遺構の重複か。40-4が出土し、8世紀代。SK328 (Fig.25上中) はSC303南側で検出。筑前型柱内甕などの古式土器を出土。SD316, SK317 (Fig.25左中) は、溝状となるが、複数遺構の重複ないし共存か。317から



[Fig.27 SX303Ⅳ北西壁面土層]

1. 灰白色。
2. 墓葬形。
3. 磷酸物。
4. 灰白色。
5. 灰色。
6. 灰白色。
7. 褐色。
8. 墓葬形。
9. 黑褐色。
10. 黑褐色。
11. 黑褐色。
12. 黑褐色。
13. 黑褐色。
14. 黑褐色。
15. 黑褐色。
16. 黑褐色。
17. 黑褐色。
18. 黑褐色。
19. 黑褐色。
20. 黑褐色。
21. 黑褐色。
22. 黑褐色。
23. 黑褐色。
24. 黑褐色。
25. 黑褐色。
26. 黑褐色。
27. 黑褐色。
28. 黑褐色。
29. 黑褐色。
30. 黑褐色。
31. 黑褐色。
32. 黑褐色。
33. 黑褐色。
34. 黑褐色。
35. 黑褐色。
36. 黑褐色。
37. 黑褐色。
38. 黑褐色。
39. 黑褐色。
40. 黑褐色。
41. 黑褐色。
42. 黑褐色。
43. 黑褐色。
44. 黑褐色。
45. 黑褐色。
46. 黑褐色。
47. 黑褐色。
48. 黑褐色。
49. 黑褐色。
50. 黑褐色。
51. 黑褐色。
52. 黑褐色。
53. 黑褐色。
54. 黑褐色。
55. 黑褐色。
56. 黑褐色。
57. 黑褐色。
58. 黑褐色。
59. 黑褐色。
60. 黑褐色。
61. 黑褐色。
62. 黑褐色。
63. 黑褐色。
64. 黑褐色。
65. 黑褐色。
66. 黑褐色。
67. 黑褐色。
68. 黑褐色。
69. 黑褐色。
70. 黑褐色。
71. 黑褐色。
72. 黑褐色。
73. 黑褐色。
74. 黑褐色。
75. 黑褐色。
76. 黑褐色。
77. 黑褐色。
78. 黑褐色。
79. 黑褐色。
80. 黑褐色。
81. 黑褐色。
82. 黑褐色。
83. 黑褐色。
84. 黑褐色。
85. 黑褐色。
86. 黑褐色。
87. 黑褐色。
88. 黑褐色。
89. 黑褐色。
90. 黑褐色。
91. 黑褐色。
92. 黑褐色。
93. 黑褐色。
94. 黑褐色。
95. 黑褐色。
96. 黑褐色。
97. 黑褐色。
98. 黑褐色。
99. 黑褐色。
100. 黑褐色。
101. 黑褐色。
102. 黑褐色。
103. 黑褐色。
104. 黑褐色。
105. 黑褐色。
106. 黑褐色。
107. 黑褐色。
108. 黑褐色。
109. 黑褐色。
110. 黑褐色。
111. 黑褐色。
112. 黑褐色。
113. 黑褐色。
114. 黑褐色。
115. 黑褐色。
116. 黑褐色。
117. 黑褐色。
118. 黑褐色。
119. 黑褐色。
120. 黑褐色。
121. 黑褐色。
122. 黑褐色。
123. 黑褐色。
124. 黑褐色。
125. 黑褐色。
126. 黑褐色。
127. 黑褐色。
128. 黑褐色。
129. 黑褐色。
130. 黑褐色。
131. 黑褐色。
132. 黑褐色。
133. 黑褐色。
134. 黑褐色。
135. 黑褐色。
136. 黑褐色。
137. 黑褐色。
138. 黑褐色。
139. 黑褐色。
140. 黑褐色。
141. 黑褐色。
142. 黑褐色。
143. 黑褐色。
144. 黑褐色。
145. 黑褐色。
146. 黑褐色。
147. 黑褐色。
148. 黑褐色。
149. 黑褐色。
150. 黑褐色。
151. 黑褐色。
152. 黑褐色。
153. 黑褐色。
154. 黑褐色。
155. 黑褐色。
156. 黑褐色。
157. 黑褐色。
158. 黑褐色。
159. 黑褐色。
160. 黑褐色。
161. 黑褐色。
162. 黑褐色。
163. 黑褐色。
164. 黑褐色。
165. 黑褐色。
166. 黑褐色。
167. 黑褐色。
168. 黑褐色。
169. 黑褐色。
170. 黑褐色。
171. 黑褐色。
172. 黑褐色。
173. 黑褐色。
174. 黑褐色。
175. 黑褐色。
176. 黑褐色。
177. 黑褐色。
178. 黑褐色。
179. 黑褐色。
180. 黑褐色。
181. 黑褐色。
182. 黑褐色。
183. 黑褐色。
184. 黑褐色。
185. 黑褐色。
186. 黑褐色。
187. 黑褐色。
188. 黑褐色。
189. 黑褐色。
190. 黑褐色。
191. 黑褐色。
192. 黑褐色。
193. 黑褐色。
194. 黑褐色。
195. 黑褐色。
196. 黑褐色。
197. 黑褐色。
198. 黑褐色。
199. 黑褐色。
200. 黑褐色。
201. 黑褐色。
202. 黑褐色。
203. 黑褐色。
204. 黑褐色。
205. 黑褐色。
206. 黑褐色。
207. 黑褐色。
208. 黑褐色。
209. 黑褐色。
210. 黑褐色。
211. 黑褐色。
212. 黑褐色。
213. 黑褐色。
214. 黑褐色。
215. 黑褐色。
216. 黑褐色。
217. 黑褐色。
218. 黑褐色。
219. 黑褐色。
220. 黑褐色。
221. 黑褐色。
222. 黑褐色。
223. 黑褐色。
224. 黑褐色。
225. 黑褐色。
226. 黑褐色。
227. 黑褐色。
228. 黑褐色。
229. 黑褐色。
230. 黑褐色。
231. 黑褐色。
232. 黑褐色。
233. 黑褐色。
234. 黑褐色。
235. 黑褐色。
236. 黑褐色。
237. 黑褐色。
238. 黑褐色。
239. 黑褐色。
240. 黑褐色。
241. 黑褐色。
242. 黑褐色。
243. 黑褐色。
244. 黑褐色。
245. 黑褐色。
246. 黑褐色。
247. 黑褐色。
248. 黑褐色。
249. 黑褐色。
250. 黑褐色。
251. 黑褐色。
252. 黑褐色。
253. 黑褐色。
254. 黑褐色。
255. 黑褐色。
256. 黑褐色。
257. 黑褐色。
258. 黑褐色。
259. 黑褐色。
260. 黑褐色。
261. 黑褐色。
262. 黑褐色。
263. 黑褐色。
264. 黑褐色。
265. 黑褐色。
266. 黑褐色。
267. 黑褐色。
268. 黑褐色。
269. 黑褐色。
270. 黑褐色。
271. 黑褐色。
272. 黑褐色。
273. 黑褐色。
274. 黑褐色。
275. 黑褐色。
276. 黑褐色。
277. 黑褐色。
278. 黑褐色。
279. 黑褐色。
280. 黑褐色。
281. 黑褐色。
282. 黑褐色。
283. 黑褐色。
284. 黑褐色。
285. 黑褐色。
286. 黑褐色。
287. 黑褐色。
288. 黑褐色。
289. 黑褐色。
290. 黑褐色。
291. 黑褐色。
292. 黑褐色。
293. 黑褐色。
294. 黑褐色。
295. 黑褐色。
296. 黑褐色。
297. 黑褐色。
298. 黑褐色。
299. 黑褐色。
300. 黑褐色。

表5. SX301はか調査区北西壁面土層(Fig.27)注記

古式土器が出土し、いずれも古墳時代前期か。SK306 (Fig.25左下)は、Ⅲ区北東隅検出。古式土器が出土し、該期の遺構だろう。SC308 (Fig.25右上, PL. 2-6)は、I区南隅検出の竪穴住居。辺の中央ではなく隅角近くにカマドがある。遺物が少なく時期不詳だが、須恵器片が僅かにあり6~7世紀か。ただしカマドの位置からは、西新町遺跡にあるように古墳時代前期の可能性もある(近接する博多169次では、辺の中央にカマドがある古式土器の竪穴住居が検出されている)。SC303 (Fig.25右下, PL. 2-5)は、290×200cmの竪穴住居。カマドは不明。SD309より新しい。40-6~8が出土し、7世紀前半~中頃(IV-2~3期)。古式土器が多く混入。その他、古墳時代初頭~前期と考えられる遺構も多くあるが、省略する(Fig.9参照)。

SX(SD)301 (Fig.26・27, Ph.12, 土層PL. 3-5~8)は、2面から3面に下げる途中で認識した大溝(壕)状遺構。幅9m, 東側上端からの深度は80cm前後。東側斜面の途中に幅1.5m前後のテラスがある。西側は浅く立ち上がる。SD304はSX301の埋没途中で掘削された溝。覆土からは、40-1・2・5・9~15, 41-3・4・6~8など6~8世紀の須恵器・土器や古式土器、弥生土器、鉄滓など多量の

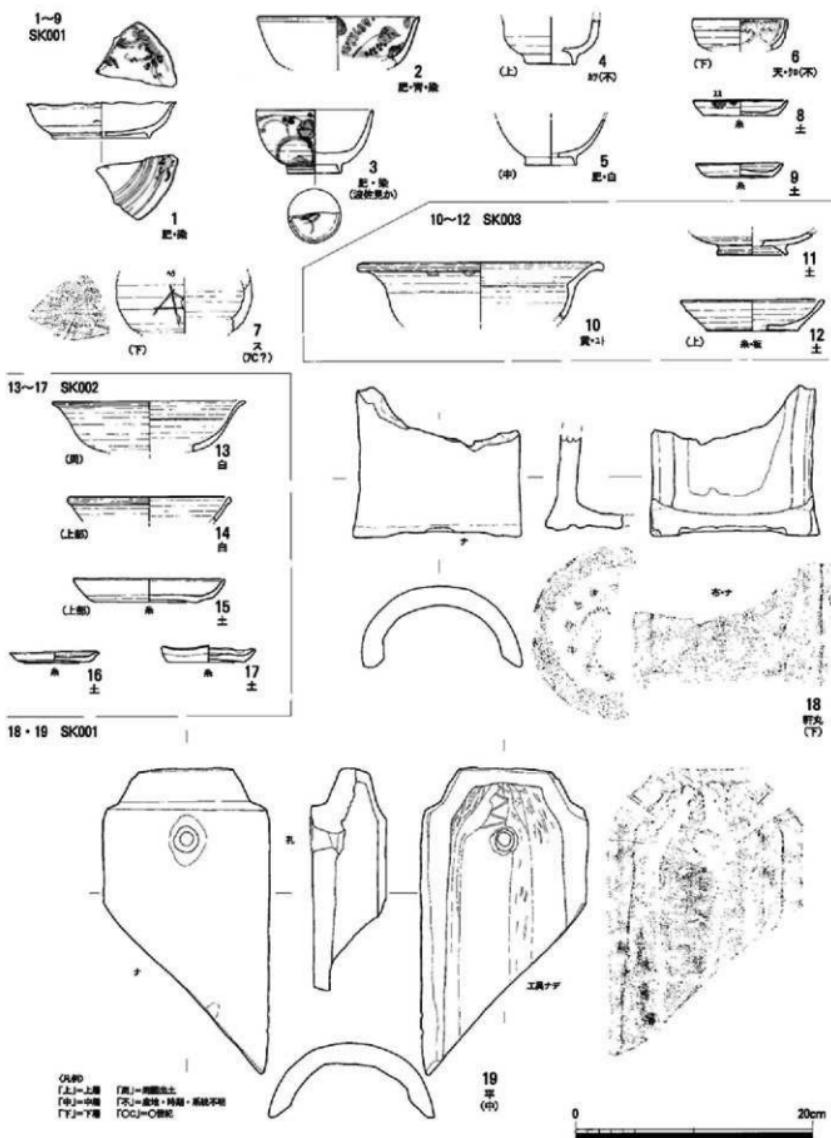


Fig.28 第1面遺構出土遺物実測図(1)(1/4)

遺物が出土した。古式土師器が多く古墳時代前期の遺構とも考えたが、下層以下にも6～7世紀の土器があり、砂丘における堆積速度を考えると6世紀後半以降の遺構であろう。さらに、溝（→29頁へ）

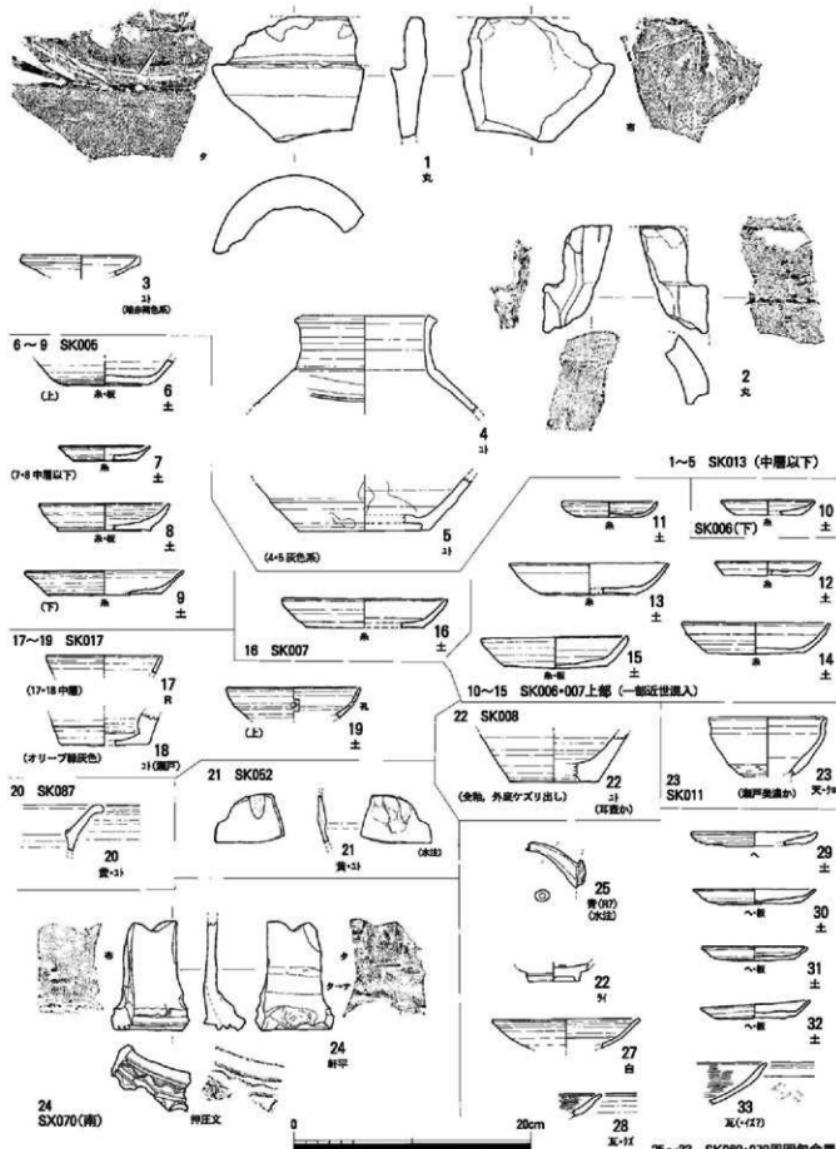


Fig.29 第1面遺構出土遺物実測図 (2) (1/4)

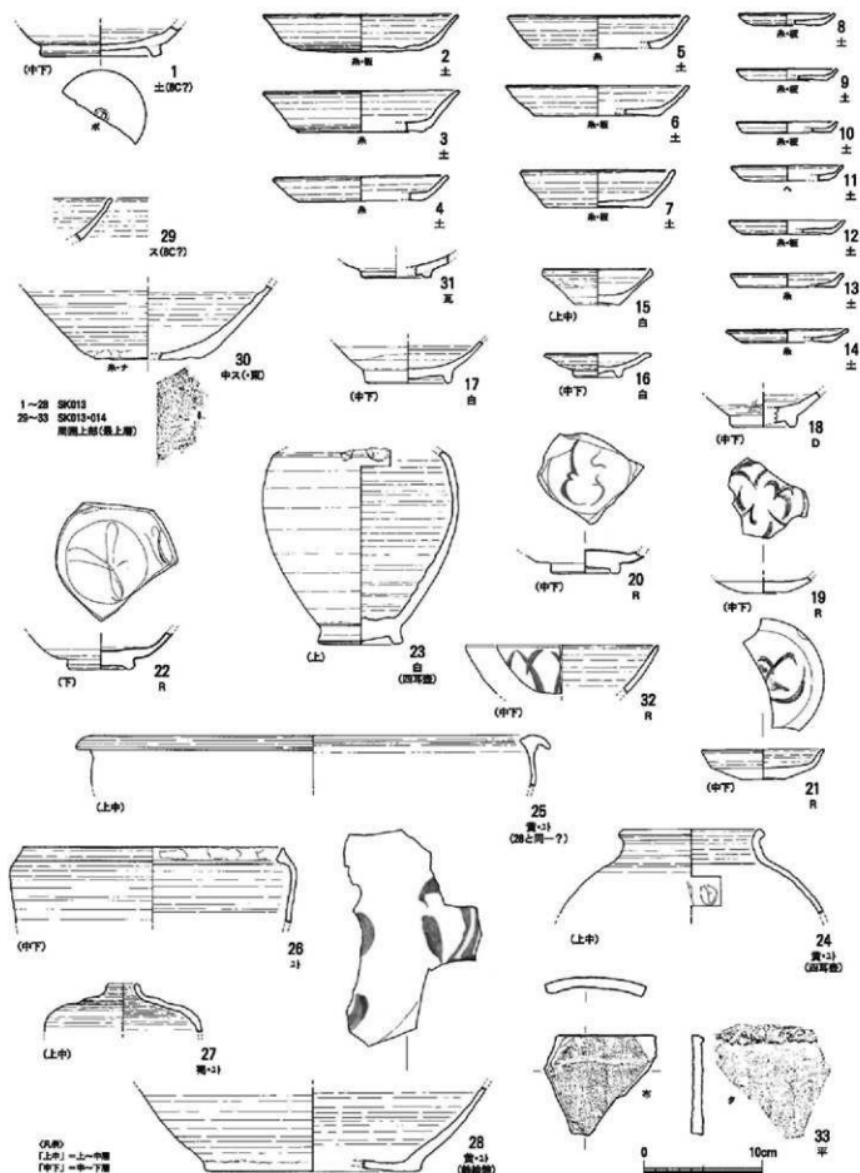


Fig.30 第1面遺構出土遺物実測図(3)(1/4)

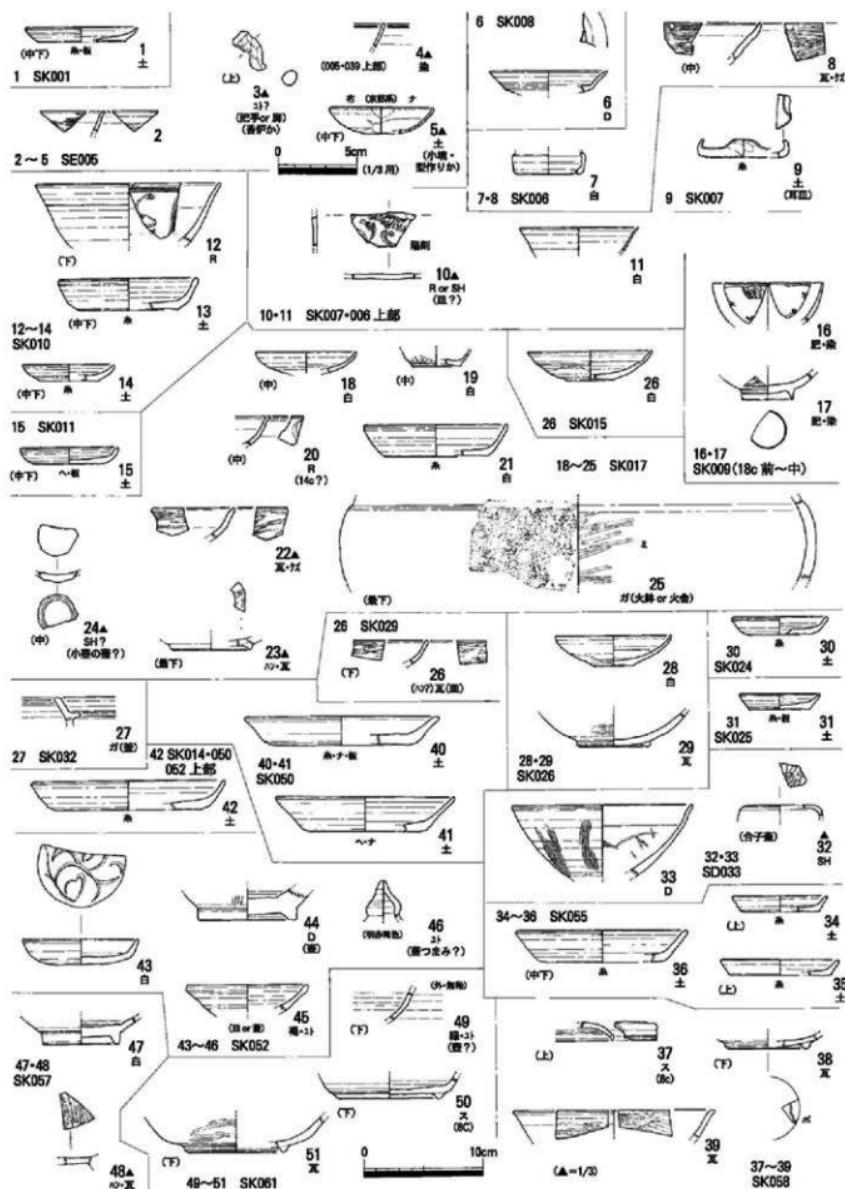


Fig.31 第1面造構出土遺物実測図(4)(1/4,一部1/3)

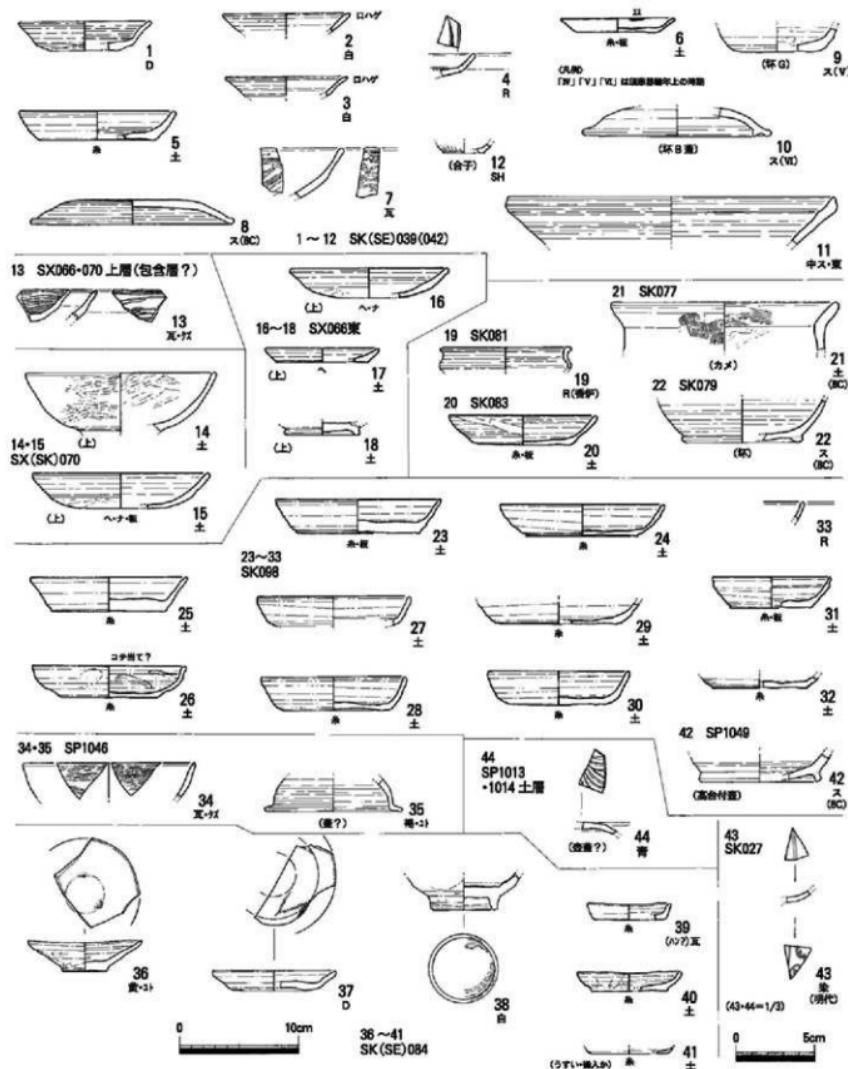


Fig.32 第1面造構出土遺物実測図(5)(1/4,一部1/3)

幅の広さやテラスの存在(段築?)から、大型古墳周溝の可能性が考えられる。西側覆土を切るSD304に底部穿孔壺をはじめ、SX301中・下層に古式土師器が多くあるが、結論的には二次的流入であり、周間に古墳時代初頭～前期の集落と墳墓があったものと考える。なお、第3面および上部(→31頁へ)

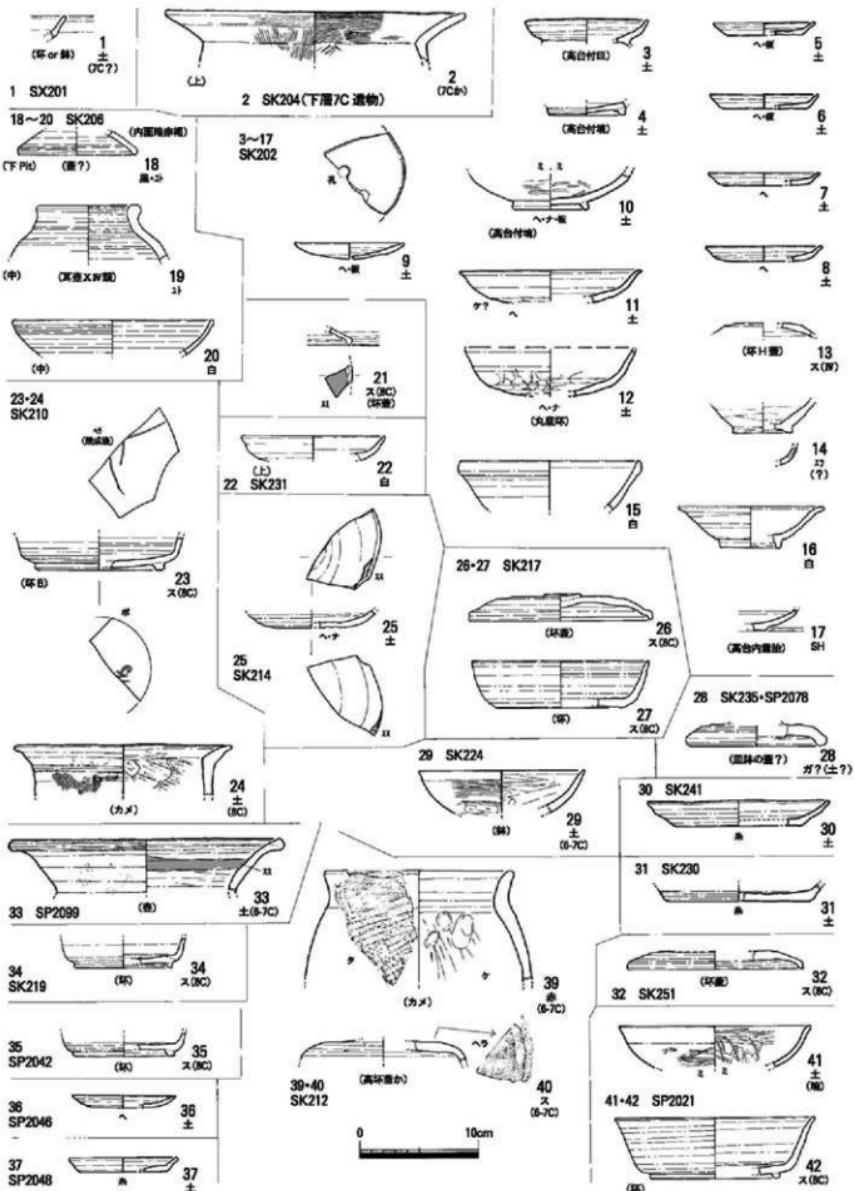


Fig.33 第2面遺構出土遺物実測図 (1 / 4)

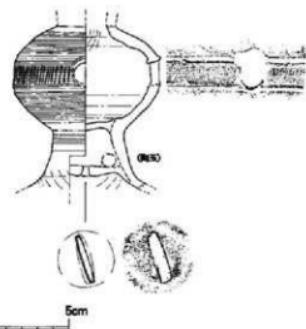


Fig.34 SK245(上層)出土遺物実測図 (1 / 3)
の「2面下」包含層から古式土器や弥生土器
が多く出土している。6~8世紀の遺物も含め
て、報告の機会を設けて紹介したいと思う。



Ph.15 銘台付甌写真



Ph.17 銘台付甌X線写真



Ph.16 同上底面写真



Ph.18 同上X線写真
(底部から)

6. 出土遺物

(1) 土器・陶磁器および土製品 (Fig.26~41, Fig.48, Fig.51)

以下、博多166次調査で出土した土器・陶磁器および瓦その他の土製品について、可能な限りの多くの遺物実測図を図化・掲載する。その結果、個々の遺物の説明記述のための紙幅を確保できなかつたため、遺物の種類・器種および製作技法やその他の特筆すべき特徴などについては、掲図中の個々の遺物実測図の下位や脇に説明を語句や略号で記した(略号は下記凡例参照)(~36頁)。各遺物の出土遺構も掲図中に記した。分かりにくい報告方法となってしまったが、必要な情報は表記掲載しているはずなので、ご寛恕を頂きたい。

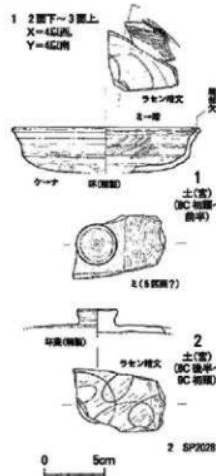


Fig.35 宮都系(畿内系)土師器
実測図 (1) (1/4)

(掲図中(Fig.26~41)の略号凡例)「白」=白磁、「D」=同安系青磁、「R」=龍泉系青磁、「ヨウ」=越州窯系青磁、「タリ」=高麗青磁、「SH」=青白磁、「青」=青磁(系統・窓不明)、「染」=青花(染付)、「ト」=繪入陶器、「天」=天目瓷、「ヨウ」=耀州陶器、「ト」=黑褐釉(陶器)、「黄」=黄釉(陶器)、「緑」=綠釉陶器(綠釉土器)、「ト」=国産陶器、「肥」=肥前陶磁、「土」=土師器・土師質土器、「ガ」=瓦質土器(中世)、「ス」=須恵器、「中」=中世須恵器、「東」=東播系(中世須恵器)、「瓦」=瓦器、「ハ瓦」=外來系瓶入瓦器、「灰」=輪窓系(瓦器)、「ケ」=泉州系(瓦器)、「黒」=黒色土器(全面黒色)、「赤」=赤燒土器(須恵器技法による土師器)、「宮」=宮都系(畿内系)土師器(飛鳥~奈良時代)、「古」=古式土師器、「ヤ」=弥生土器、「ナ」=板燒窯、「ト」=燒塗壺、「硬」=朝鮮半島系陶質(硬質)土器、「ヨウ」=(~36頁へ)

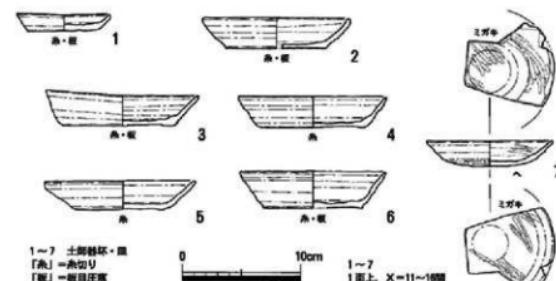


Fig.36 第1面上(検出時)出土遺物実測図 (1) (1/4)

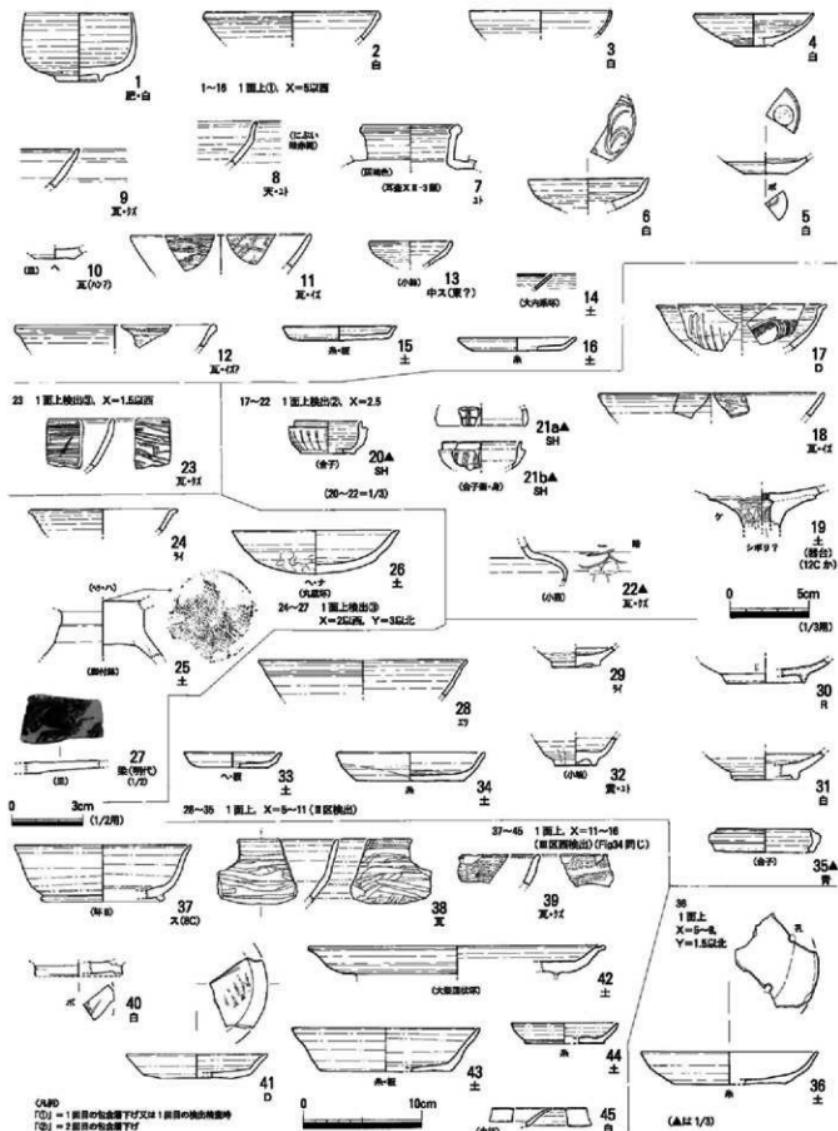


Fig.37 第1面上(検出時)出土遺物実測図(2)(1/4, 一部1/3, 1/2)

CARD
 「(1)」=1番目の検出箇所又は1番目の検出時期
 「(2)」=2番目の検出箇所

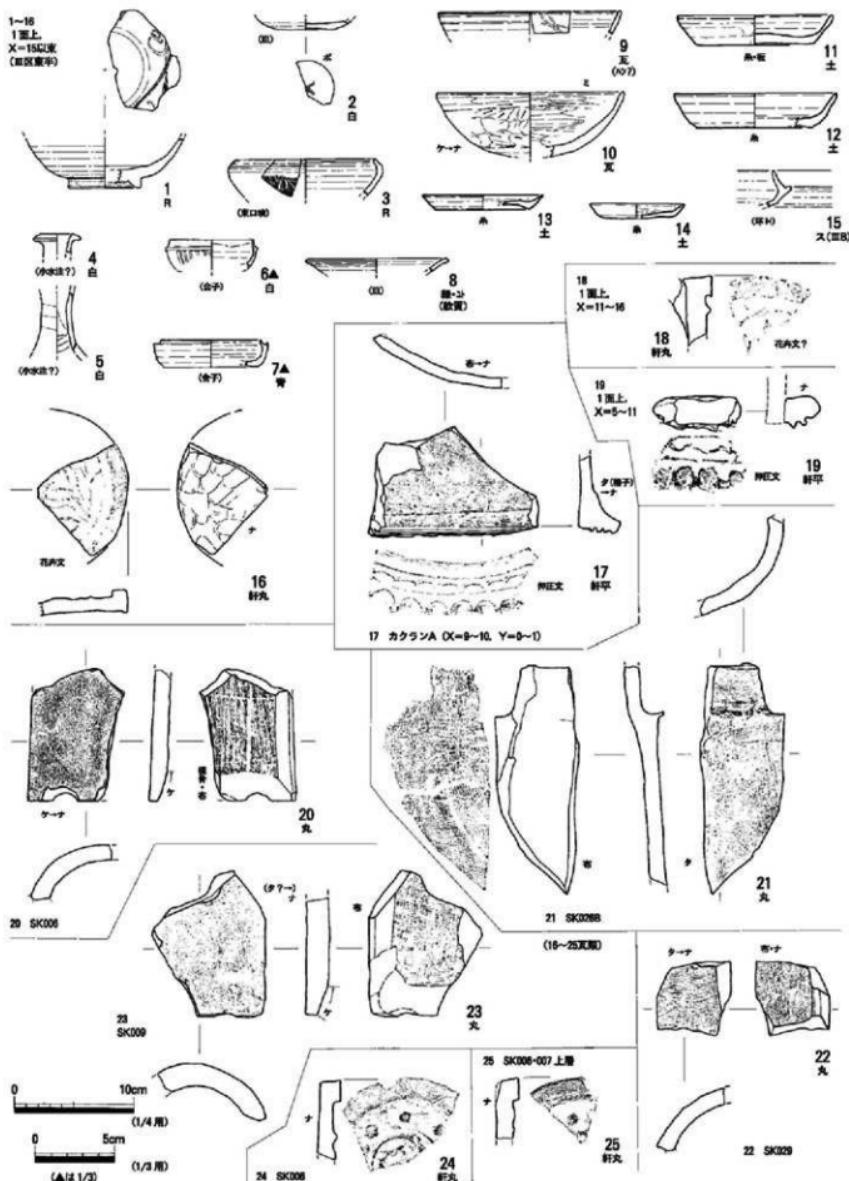


Fig.38 第1面上出土遺物 (3), 第1面出土瓦実測図 (1/4, 一部1/3)

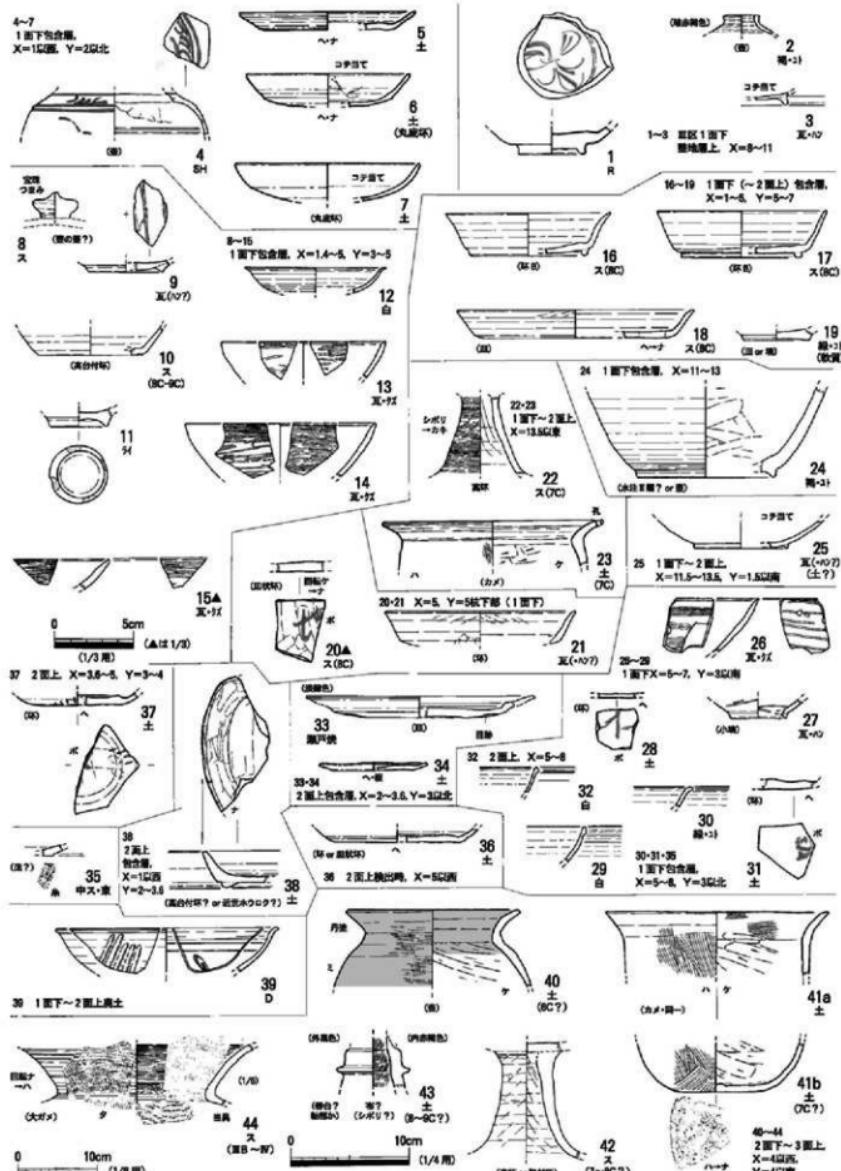


Fig.39 第1面下～第2面上包含層出土遺物（1）、第2面下包含層出土遺物（1）実測図（1/4、一部1/3）

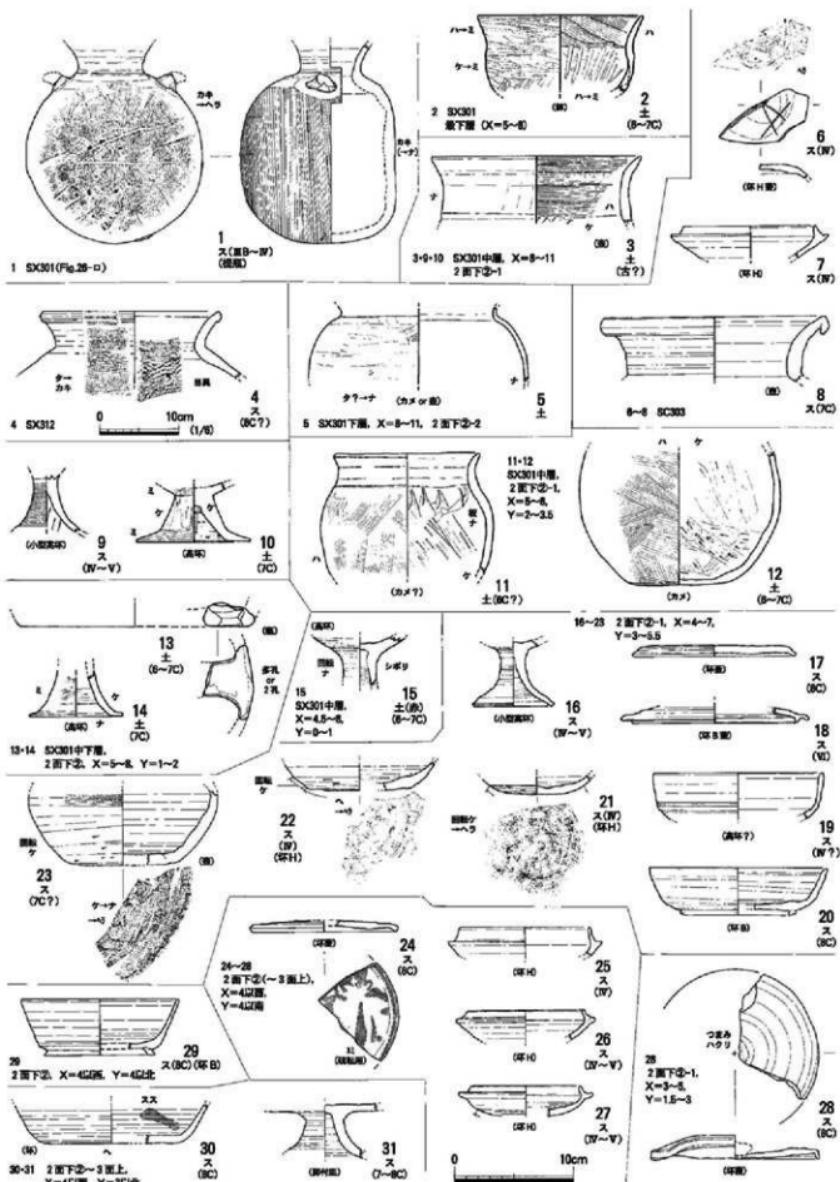


Fig.40 SX301および第3面遺構出土遺物、第2面下～第3面上包含層出土遺物 (2) 実測図 (1/4, 一部1/6) (6～8世紀土器)

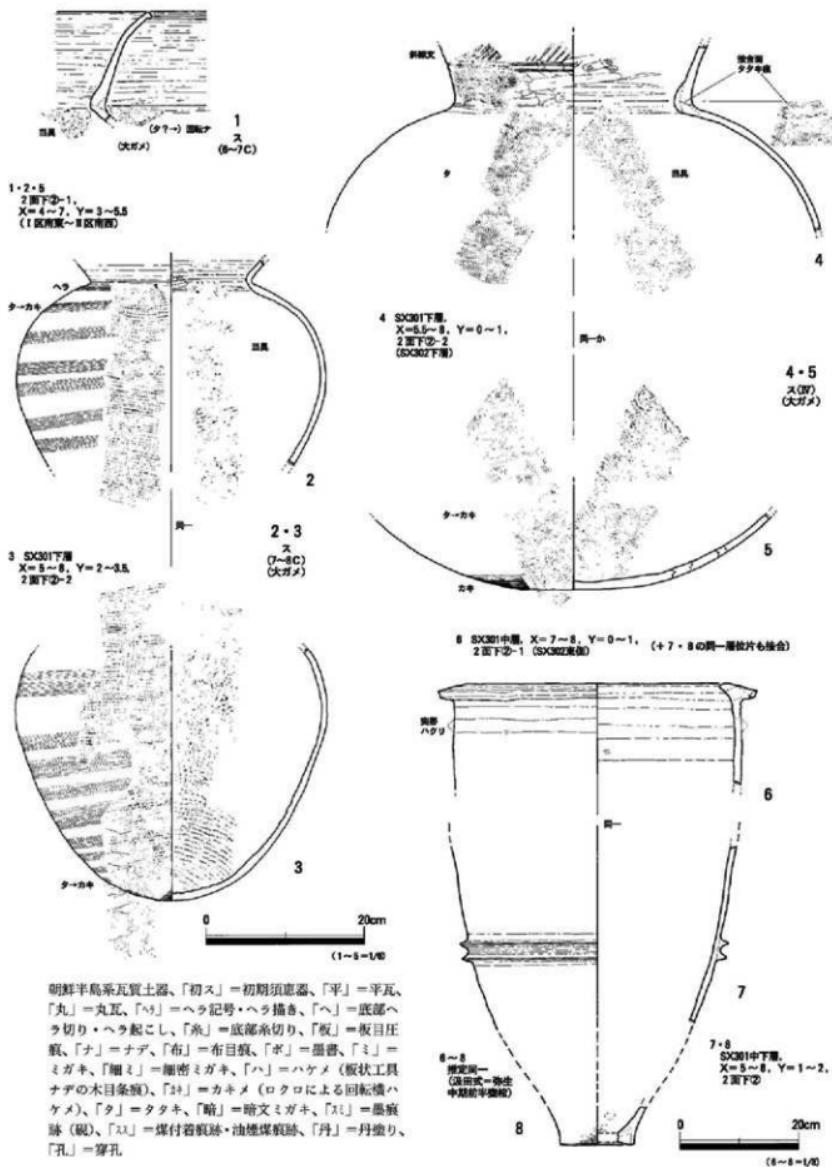


Fig.41 SX301, SX302出土大型土器実測図 (1/6, 1/8)

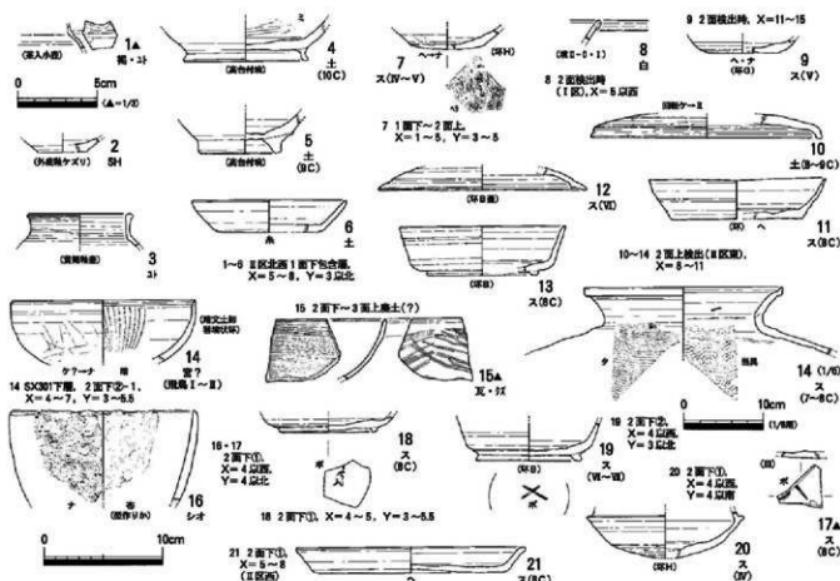


Fig.42 第1面下～第2面上包含層出土遺物(2), 第2面下包含層出土遺物(2)実測図(1/4, 一部1/3)

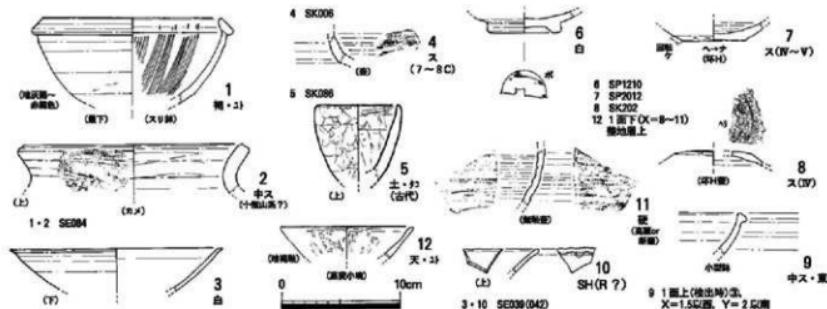


Fig.43 第1・2面造構および第1面上(検出時)出土遺物実測図(1/4)

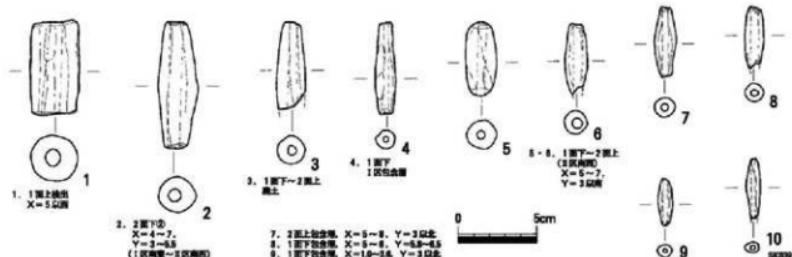


Fig.44 博多166次出土土鐘実測図(1/3)

(2) 鉄製品および鉄滓・フイゴ羽口 (Fig.43)

博多166次では、各時代の鉄製品が82点前後、鉄滓が160点前後、フイゴ(輪)羽口が12点出土している。(註) 数量で「前後」とするのは、「鉄滓」か「鉄器」であるか不明瞭であったり、滓のうちガラス状の「鉄滓」か「ガラス滓」かであるか不明であったりするものが少なからずあるためである。このうち主に第2面以下において、層位および形状などから古墳時代(主に推定古墳時代前期)に属する可能性が比較的高いものを図示した。ただし一部は飛鳥～奈良時代に属する可能性がある(Fig.43-6の釘など)。鉄器では1・2のような鍛造板状鉄製品や、楕円精鍛鍛冶滓やフイゴ羽口など鉄精鍛に関わる遺物が多く出土していることが注目される。周囲では博多濱の砂丘I南半の調査区において(59・65・147次など)、古墳時代初頭～前期の鍛冶・精鍛関係遺物が広く出土することが知られており、当該期における鉄器生産と技術革新の拠点であるとも評価されている(村上恭道2007『古代国家と鉄器生産』青木書店)。本調査区の出土遺物は、同地點自体が工房であることを示すものではないが、周辺(砂丘斜面上方である北側一帯)の鍛冶・精鍛工房群から流入してきたものであろうと推測できる。なお鉄滓の形状から古墳時代と言える個体が14点前後があり、その他も第2面下包含層と、それ以下の出土のものは古墳時代であろう。

(以上、鉄製品および鉄滓の報告については長家伸のご助力とご教示を得た。)

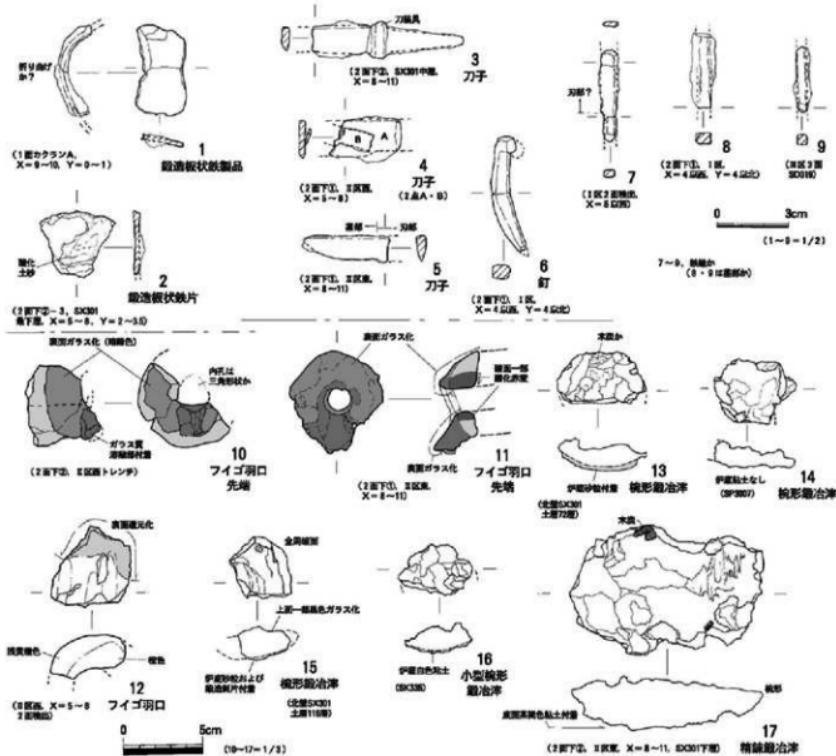


Fig.45 博多166次出土鉄製品(1/2)、フイゴ羽口・鉄滓(1/3)実測図

(3) 博多166次出土の玉作り関連資料について

吉留秀敏（福岡市埋蔵文化財第1課）

博多遺跡群第166次調査では碧玉製玉製作関連遺物が出土した。遺物には玉未製品と砥石がある（Fig.46）。

1はI区南東～II区南西側の2面下層で出土した碧玉製管玉未製品である。出土層位からみて古墳時代後期と推定されるが、後述する根拠から弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉に所属するものと考えられる。資料はほぼ完存し、長さ5.2cm、幅1.6cm、厚さ1.6cmを測る。石材は肉眼観察であるが、硬質緻密で深い緑色を呈し、赤褐色を帯びた節理面の特徴などから島根県出雲地域の花仙山産出と推定される。全局に調整剥離面があり、研磨痕跡は認められない。調整剥離の観察から、素材は節理面を有する角礫状の母岩（石核）の端部から剥離された断面略三角形の横長剥片である。剥片に対しては三面並びに両端に僅かな二次調整が施される。ただし、節理面を残す裏面への右方向からの二次調整は深い階段状剥離を生じ、これが次の研磨工程に進まず廃棄される理由となったのかもしれない。2はII区西側の2面下層で出土した砥石である。細粒砂岩製であり、両面に平板な研磨面を有する砥石を裁断と荒い敲打調整で手持ちの大きさに成形している。表面右側に二条の溝状研磨溝があるが、右側施溝中央で裁断されている。溝幅は二条共に上部で0.8cm、深さ0.5cmで、断面逆台形を呈する。玉砥石として積極的に評価できるかはやや疑問であるが、有溝砥石としての特徴と、施溝分割という成型時の手法が山陰地域の「西川津技法」などに見られる特徴的技術であり、何らかの関連が予測される資料であるのでここに提示しておきたい。

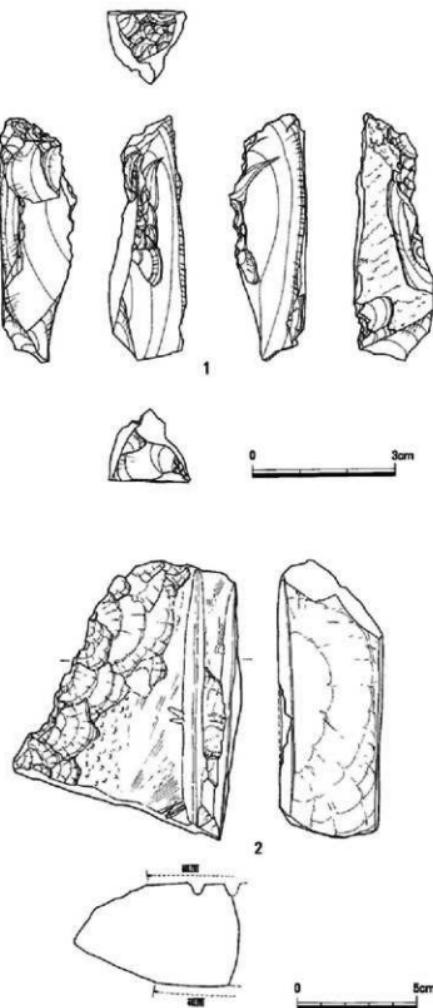


Fig.46 石製品実測図（1）玉作り関連資料（1/1, 1/2）
（1）1号管玉未製品、2号砥石
（2）2号砥石

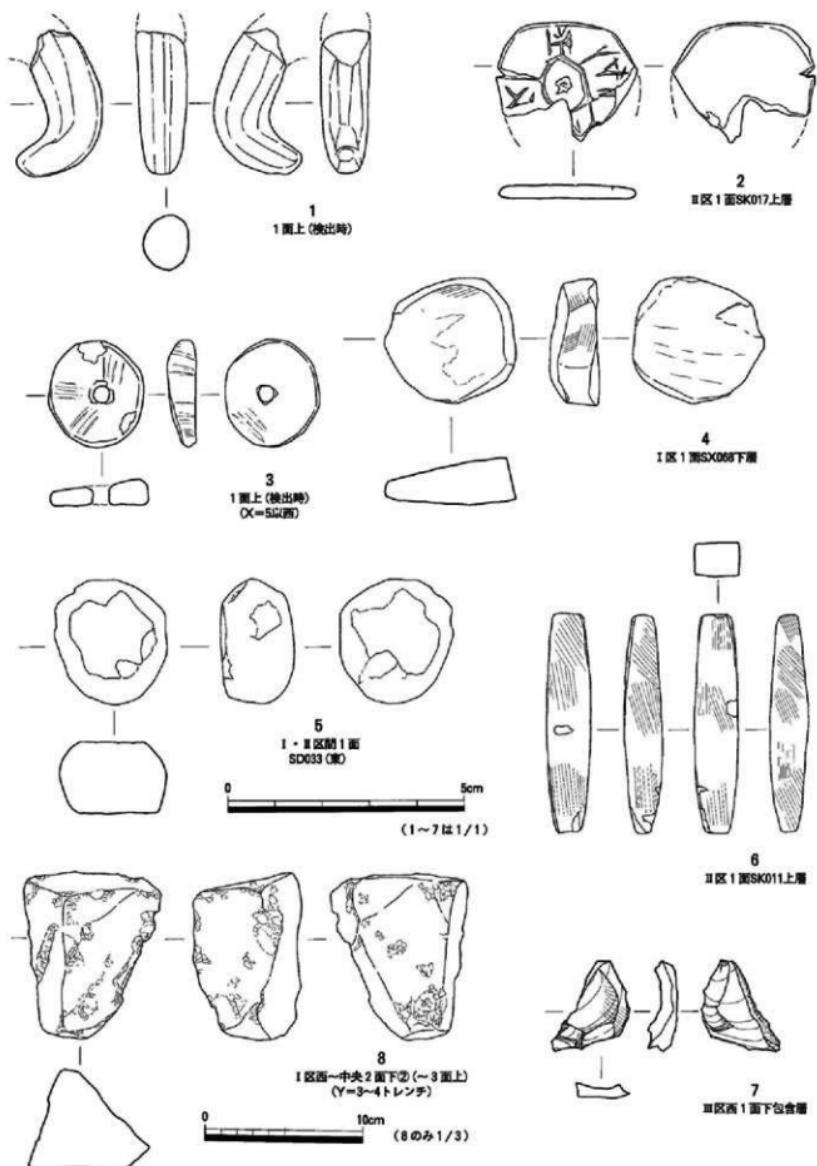


Fig.47 石製品実測図 (2) (1/1, 1/3)

さて、博多遺跡群の碧玉製玉製作の資料は本次調査のみでなく、これまでに17次、118次などに出土例がある。また、59次では碧玉との共伴出土例の多い水晶製剥片が出土している。これらの出土地点は何れも博多遺跡群の南部域、博多部砂丘の後背側斜面に集中している。共伴時期を示す調査例は少ないが、17次では弥生時代後期後葉～終末期の山陰系土器を出土した住居、土坑から出土している。また、118次では碧玉の石核が出土しており、調査区内では弥生時代後期後葉の山陰系土器が出土している。59次例は古墳時代前期前葉の住居内からの出土である。こうした点から今回の資料は、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の時期幅に収まると考えられる。博多遺跡群において山陰地域からの石材交易と管玉製作が行われていたことを示す資料と評価される。

(4) 博多 166次出土の石製品について

夏木大吾（福岡大学考古学専攻）

(Fig.47) (※Fig.47・48の各遺物の出土遺構と層位は図中に記した。)

1は片岩製の勾玉である。肉眼で見た石質は滑石に近い。丁寧な研磨が施され、表面を滑らか仕上げ、扁平化せず全体に丸みを帯びる。古墳時代前期後半～中期前半のものか。2～6は滑石製品である。2は円板で片面には四ヶ所に文様（字か？）が刻み込まれている。3は有孔円板で、表面が工具によって整えられる。4は石鍋の再加工品で、研磨による面取り調整がなされている。5は石鍋底部を再利用して瓦玉状に加工している。6は用途不明品である。断面四角形の平面長方形形状で中心部が外側に張り出す。表面は不定方向の細かな研磨が観察できる。7は黒曜石の剥片である。漆黒色で風化は弱い。主剥離面の剥離は2枚の剥離面をもつが、一回の加熱により形成されたものである。弥生時代前期～中期前半頃か。8は大きめの軽石である。使用や加工の痕跡はない。しかしながら、使用法としては石を網に包み浮子として用いた可能性が考えられ、その場合は明確な使用痕跡（緊縛痕跡など）が残りにくい。そのため漁具と認識し図化掲載した。

(Fig.48)

1～9はすべて滑石製品である。1は小型鉢で、外面にはノミ状工具の痕跡が残る。部分的に煤が付着するが、石鍋か温石のどちらを再利用したかわからない。2はミニチュアの石鍋片で、突帯状把手が付く。被熱痕跡はない。3は石鍋片で、突帯状把手が付くタイプである。把手部分には工具痕が残る。把手にノミを打ち込み、刻目部分より加熱あるいは加圧することで分割している。4は石鍋片で、周囲に鈎がめぐるタイプである。5は石鍋の口縁部片で、突帯状把手が付く。口唇部と把手部分には再加工の痕跡がある。把手下部のノミ状痕跡は把手の除去をはかったときのものだろう。6は石鍋片で外面に工具による割付の痕跡が認められる。刻みを入れて、幅2cm程度の長方形滑石素材を取りだそうとしている。7は石鍋片である。底部から口縁部にかけて体部が大きく開くタイプで、森田分類のC群にあたる（森田1983）。底部に近い体部で、鋸引きによって底部から切り離される。8は温石で、中心には穿孔がある。全体には煤が付着する。9は温石の転用品である。広い面には磁石に特徴的な緩やかな凹凸と擦痕が認められる。10は凝灰質砂岩の仕上げ砥である。両側面には鋸引きによる分割痕跡がある。11は砂岩製の砥石である。12は軽石で、肉眼による加工痕跡は観察できないが、平坦な面取り調整が行われたようである。13は円礫である。表面の一部には煤が付着し、被熱した痕跡がある。

出土した滑石製品のほとんどが石鍋片あるいはその転用品である。石鍋片は工具による加工痕跡を残すものが多い。これら石鍋片はすでに壊れた石鍋に加工を施すか、意図的に割った石鍋に工具によ

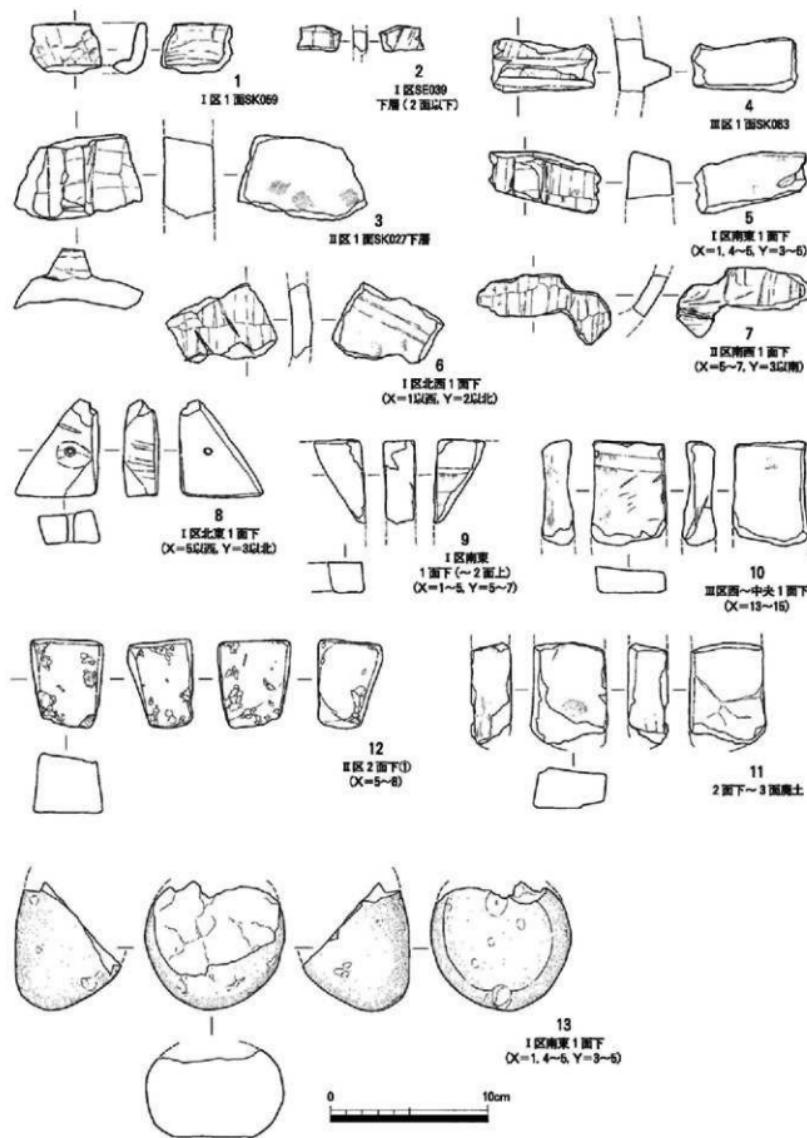


Fig.48 石製品実測図 (3) (1/3)

る調整が加えられたもので、石鍋の解体・分割の際にはFig.48-3の例にみるような工具による割付も認められる。Fig.48-6の工程は二丈町木舟・三本松遺跡の類例から石鍤の素材を得ようとしたものと推定される。同遺跡では2点の石鍋転用石鍤の接合関係から転用工程が復元されており、石鍤の転用素材として棒状の素材が作出されることが明らかになっている（夏木2008）。

石鍋編年でも新相に位置付けられるⅢ群においてのみノコ引き痕跡の例が存在するのは興味深い。ノコ引きによって石鍋を加工する例は博多遺跡群35次調査区にあり、遺跡内では集中的に石鍋解体～転用素材生産が行われていたようである。その時期的中心は13世紀～14世紀代にあり、Ⅲ群におけるノコ引き解体が顕著である。

参考文献

森田 勉1983「滑石製容器・特に石鍋を中心として」『佛教藝術』148号、毎日新聞

夏木大吾2008「木舟・三本松遺跡木棺墓出土滑石製沈子の考察」『七隈史学』第10号、七隈史学会

（5）博多166次出土動物遺存体について

屋山 洋（埋蔵文化財第1課）

博多遺跡群第166次調査で出土した動物遺存体はウシ・ウマの大型哺乳類とカキ類が出土した（表6）。担当によると包含層の時期は古墳時代前期に遡る可能性はあるものの不明な点も多いということである。（編集者注：第2面以下の遺物包含層には古墳時代前期の遺物も多く存在するが、古墳時代後期～奈良時代も多く、「大漢」＝渡状遺構SX301での獸骨の出土層位からすると、ほぼ古墳時代後期以降と考えてよい。）

・ウシ

主に古代以降から12世紀後半の包含層から出土しているが、中には古墳時代前期から飛鳥時代に遡る可能性があるものがある。部位は臼歯のみで取り上げ後に細変化しており、歯冠高等の計測はできない。

・ウマ

ウシ同様に包含層からの出土で時期は古墳時代後期から奈良時代を主とする。012や015では6本以上まとまって出土しており、頭蓋骨ごと（もしくは全身）の廃棄・埋葬と考えられる。

・カキ類

12世紀後半のSK010からまとまって左殻・右殻とも30個ほど出土した。殻長は一部4.5cmを測るがほとんどが3cm以下と小型である。

カキは一つの土坑から左右殻がそれぞれ30点程出土しており、一度の消費単位が分かれる例である。大きさは2～3cmと他の調査区で出土するカキ類と同程度の大きさで、博多遺跡群で消費されるカキ類が一般的に小型であったことが分かる。甲殻類のフジツボも小型で、カキ殻に付着した状態で博多遺跡群内に持ち込まれていた可能性が高い。

ウシ・ウマは古墳時代から12世紀後半と博多遺跡群の中では古い時期に属する例である。包含層からの出土であるが、歯がまとまって出土していることから、もともとは土坑に廃棄もしくは埋葬されたものと考えられる。歯冠高は015が5～7cmとやや長めであるが、007・011・013は3～4.5cmと短く、老齢の個体である。歯しか遺存していないため、老齢で死んだウシ・ウマを埋葬したのか解体して利用したのかなど、古代において役畜としての役割を終えた老牛馬が資源として利用されたかどうか不明なのは残念である。

表 6. 博多166次出土動物遺存体同定一覧表

標本記号	動物種名	通標記号	部位	大分類	小分類	部位名	左右	部位I	部位II	発現度	判別	被施	時代	
001	06-030083	1 北区	SK004(骨)	魚類	マダイ	胸鰓骨	右側	右側	P3かP4		なし	なし	12世紀中期～後半	
002	06-030086		SK009(瓦世屋)直石	哺乳類	ヒト	頭				痕跡2～3cm	痕跡	瓦世屋(建物基礎)	12世紀後半～13世紀初半	
003	06-030010	1 北区	SK010(骨)以下	鳥類	カツオ	左肩骨あり				痕跡1.0cm以下	痕跡	瓦世屋	12世紀後半～13世紀初半	
004	06-030010	1 北区	SK010(骨)以下	哺乳類	フジシホ類						なし	なし	古墳時代初期～後期	
005	06-030023	2面下3面上1 区中央	哺乳類	ウシ	臼齒	複数か	複数か	複数か		複数か	複数か	複数か	古墳時代中期～後期	
006	06-030020	2面下3面西	哺乳類	ウシ	臼齒	複数か	複数か	複数か		複数か	複数か	複数か	古墳時代中期～後期	
007	06-030016	遺構不明	哺乳類	ウマ	上顎骨	左有り?	左有り?	左有り?	左有り?	複数か	複数か	複数か	複数か	古墳時代中期～後期
008	06-030013	1 北区	SK013(骨)	鳥類	カツオ	左翼		16個以上	複数	複数2～3.5cm	複数	複数	12世紀後半～13世紀初半	
009	06-030013	1 北区	SK013(骨)	鳥類	カツオ	右翼		17個以上	複数	複数3.5cm以下	複数	複数	12世紀後半～13世紀初半	
010	06-030013	1 北区	SK013(骨)	哺乳類	長骨片								なし	なし
011	06-030013	1 北区	哺乳類	ウシ	臼齒	複数か	複数か	複数か		複数か	複数か	複数か	古墳時代中期～後期	
012	06-030025	2面下1 区南	哺乳類	ウマ	上顎骨	右側	0本以上か	複数	複数	複数高4～6cm	複数	複数	複数	古墳時代中期～後期
013	06-030025	2面下1 区南	哺乳類	ウシ	下顎骨		2本以上	複数	複数	複数高4 cm前	複数	複数	複数	複数
014	06-030025	2面下1 区南	哺乳類	ウマ	上顎骨									複数
015	06-030025	2面下1 区南	哺乳類	ウマ	上顎骨		左側4本以上	右側3本以上	複数	複数高5～7cm前	複数	複数	複数	複数
016	06-030014	1 北区	SK014(骨)	哺乳類	ウマ	臼齒		複数	複数					古墳時代中期～後期
017	06-030021	2面下1 区南	哺乳類	ウマ	臼齒									古墳時代後期～
018	06-030014	1 北区	SK014(骨)	鳥類	カツオ	左翼	10個以上		複数	複数2.5～4.5cm			12世紀後半	
019	06-030014	1 北区	SK014(骨)	鳥類	カツオ	右翼	15個以上		複数	複数2～3cm			12世紀後半	
020	06-030022	2面下1 区南	哺乳類	骨片										古墳時代中期～後期
021	06-030015	2面下1 区(1)中央東	哺乳類	ウシ	臼齒									古墳時代中期～後期
022	06-030015	2面下1 区(1)中央東	SK015(骨)上顎	鳥類	カツオ	左翼								古墳時代中期～後期
023	06-030006	1 北区	SK006(骨)	哺乳類	ウマ	上顎骨								12世紀後半
024	06-030006	1 北区	SK006(骨)	哺乳類	ウマ	上顎骨								12世紀後半
025	06-030006	1 北区	SK006(骨)	哺乳類	ウマ	上顎骨								12世紀後半
026	06-030025	2面下1 区(1)中央	大漁(SK011)中腹	哺乳類	ウシ	臼齒								古墳時代中期～後期
027	06-030023	2面下1 区(1)中央東～西東	哺乳類	ウシ	臼齒									古墳時代中期～後期
028	06-030023	2面下1 区(1)中央東～西東	哺乳類	ウシ	臼齒									古墳時代中期～後期
029	06-030013	1 北区	SK013(骨)下顎	骨片										12世紀後半
030	06-030017	2面下1 区(1)中央東～西東	哺乳類	ウシ	臼齒									古墳時代中期～後期
031	06-030027	2面下1 区(1)中央東～西東	SK25(26FT)	哺乳類	ウシ	臼齒								古墳時代中期～後期
032	06-030003	1 北区		骨片										(20世紀12世紀前)
033	06-030002	1 北区		哺乳類	ウマ	臼齒								(古墳時代中期～後期)
034	06-030003	1 北区	SK005中腹以下	哺乳類	ウマ	臼齒								12世紀後半
035	06-030021	2面下1 区(1)中央～西東	哺乳類	ウシ	臼齒									古墳時代中期～後期
036	06-030011	1 北区	SK011(骨)以下(～下顎)	骨片										古墳時代中期～後期
037	06-030027	2面下1 区(1)中央東	大漁(SK011)下顎	骨片										古墳時代中期～後期

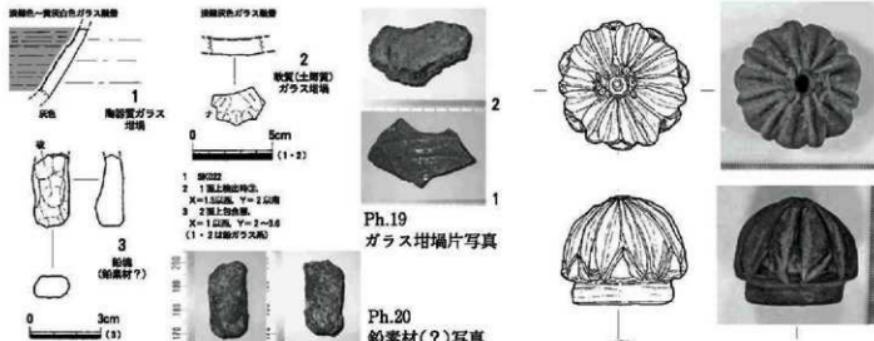


Fig.49 ガラス坩埚、鉛素材実測図 (1/3, 1/2)

(6) その他の特殊遺物

Fig.49-1・2はガラス坩埚。いずれも内面に溶融凝固したガラスが付着。蛍光X線分析により、鉛を主成分とするガラスと判明した。銅元素が含まれ、着色成分か。1は無釉の中国陶器(灰色炻器質)、2は土器器(灰質)鍋の転用で、2の外側には煤が付着する。Fig.49-3は鉛塊。蛍光X線分析で成分を確認している。27.03g。Fig.50は青銅製の椎(古代の分銅、權衡具)。短小な鋲状で、体部に笠

Fig.50 銅製椎実測図 (1/1)

(写真はPh.21)



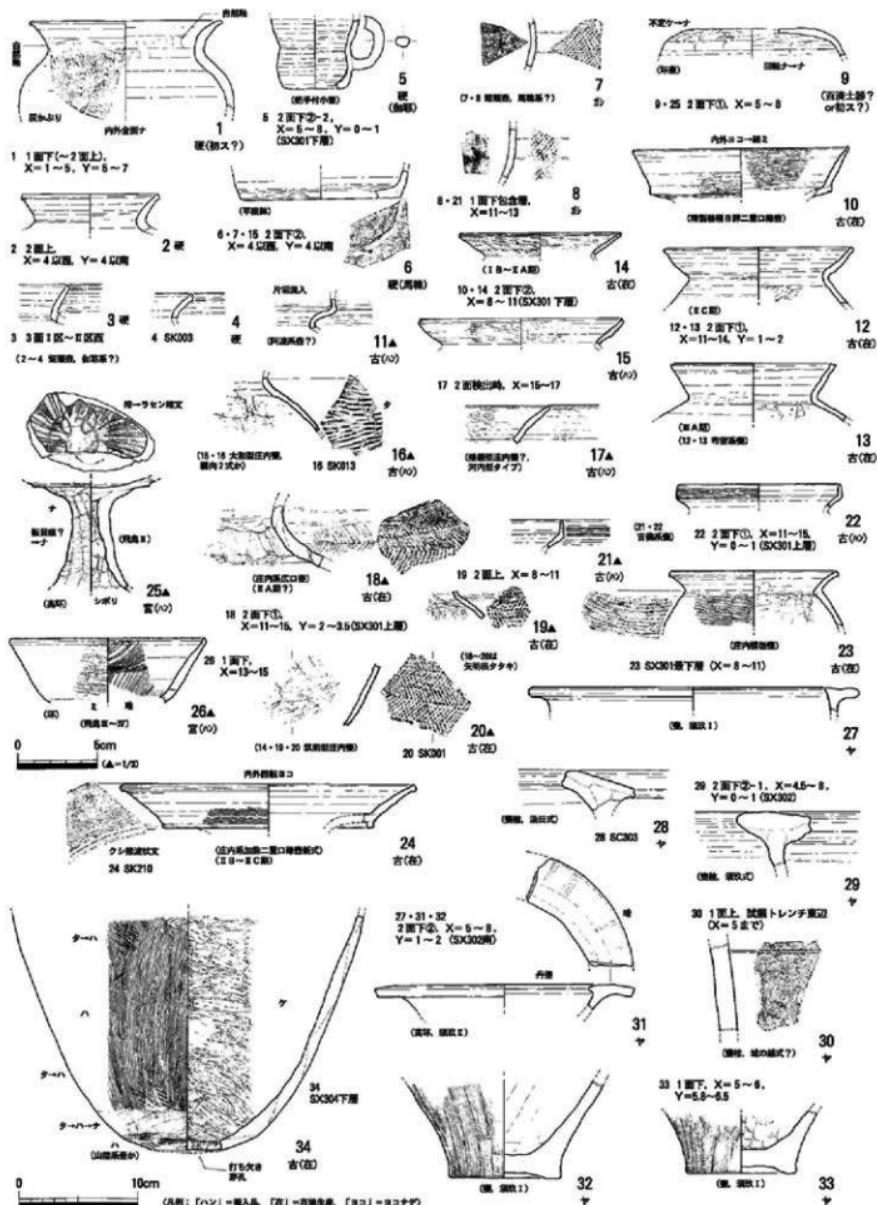


Fig.51 朝鮮半島系土器 (1～9), 韓都系土器 (2) (25～26), 古式土器 (10～24・32), 弥生土器 (27～33) 実測図 (1/3, 1/4)
(※1～4, 9は須恵器の可能性もある。また他にも三輪・三国系、新羅・高麗系土器片あり。)

骨状の稜を有し、下部は低い円柱状台部となる。66.59 g。頂部中央の孔は別作りの紐を差し込むものだろう。頂部周囲に「ス」などの鋳造欠陥か(?)、複数の小孔がある。底面に「十」字状のヘラ傷があるが、記号か。金属権の中でも比較的優品であり、古代官衙の存在を示す重要な資料である。

III.まとめ

博多166次では、主に11~14世紀、6世紀後半~9世紀初頭、古墳時代前期の遺構群を検出した。このうち、古墳時代前期についてはあまり報告できなかったので、古式土師器(弥生土器を含む)の図示などの資料紹介の機会を持ちたい。8世紀前後の遺物の様相は、調査地の北側に古代の官衙域が想定されているが、その隣接地の様相を示す。官衙関連遺物として銅製権、墨書き土器、宮都系土師器(Fig.35)が出土している。宮都系暗文土師器の环類は、未図示の小破片を含めれば10点以上がある。7世紀中頃(飛鳥II期)の宮都系高環(Fig.51)もあり、17次の高句麗土器とともに、先行する初期官衙施設が7世紀代に存在したことも想定されよう。博多では宮都系土師器がこれまで多数出土しているが、鴻臚館(筑紫館)には意外と少なく、その差異の意義付けが課題である。塚状遺構SX301は、大型古墳の周溝と推定し、Fig.52に前方後円墳とした場合の復元案を図示した。SD309・310が前方部前面ライズを区画すると想定し、南北方向主軸として復元した。この想定案は根拠が少なく、やや突飛なものであるが、今後の周囲調査において注意すべきものとして敢えて掲載した(今後の調査により訂正されたい)。SK245上層の輪台付罐(Fig.34)は古墳祭祀に関わるものかもしれない。SC303からIV期中頃には周溝の一部が切られ、塚の掘削はそれ以前である。台付罐やSX301上層の提瓶(Fig.40)がTK43期頃であり、これが掘削(古墳建造?)時期を示すか。近隣の156次に小石室3076号遺構があり、後期古墳の分布が推定されることが注意される。またSD318・319から、8世紀初頭には古墳の一部が破壊されている。

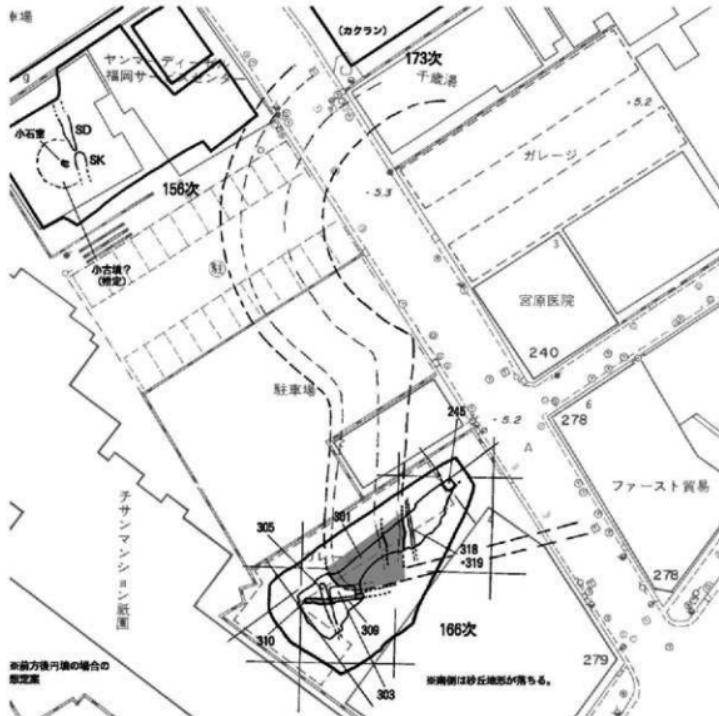


Fig.52 SX301と古墳想定復元図 (1/500)



1. 第1面I区遺構検出状況（北東から）



2. 第1面III区西側(・II区東側)敷地面遺構検出状況(北西から)



3. 第1面下II区東側(・III区西側)敷地面遺構検出状況(南東から)



4. 第2面III区西半～中央遺構検出状況（南西から）



5. 第2面I・II区調査状況（南西から）



6. 第2面II区東半～III区調査状況（北東から）



1. 試掘トレンチ土層状況（北東から）



2. 第1面SK055（・076）土層状況（北西から）



3. 第2面SK202土層状況（南から）



4. 第3面III区中央構造検出状況（右側はSX301落込み）（北西から）



5. 第3面SC303土層状況（西から）



7. 第3面SD305北端南北土層(右), SX334南北土層(左)（南西から）



6. 第3面SC308カマド検出状況（東から）



8. 第3面II・III区(SX301ほか)完掘状況（南東から）



1. 第3面SX312遺物出土状況(SX301覆土中)（南から）



2. 第3面SX301, SX312土層状況（南から）



3. 第2面下SX302(SX301上層)遺物出土状況（南西から）



4. 第3面SX304(SX301西)底出土状況（東から）



5. 第3面SX301中央～東側土層（南西から）



6. 第3面SX301東側土層（南西から）



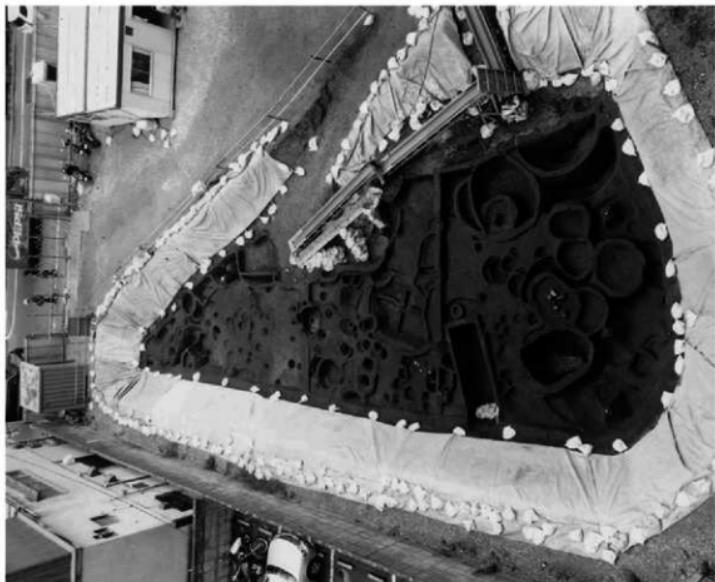
7. 第3面SX301西側土層（南から）



8. 第3面SX301中央土層（南から）



出土遺物写真 (「51-52」などはFig.番号に対応)



1. 第1面調査状況全景（南西から）



2. 第1面調査状況全景（北東から）



1. 第1面I・II区調査状況（南東から）



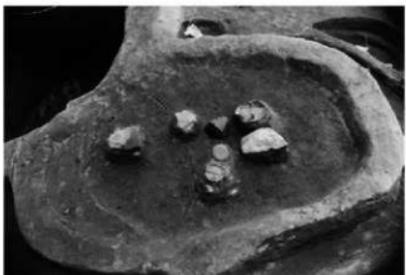
2. 第2面調査状況
全景（南西から）



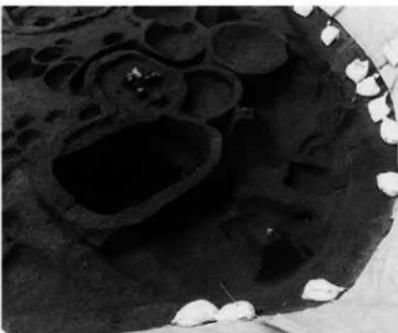
1. 第3面調査状況(北東から)



2. 第3面I・II区調査状況(南西から)



1. SK002遺物出土状況（北西から）



2. SX070・066ほか掘削状況（北西から）



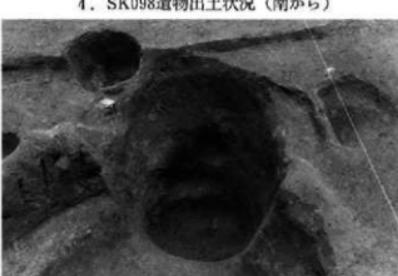
3. SE084途中掘削状況（南から）



4. SK098遺物出土状況（南から）



5. SK017掘削状況（東から）（一部未掘）



6. SK010完掘状況（西から）



7. SK210遺物出土状況（南西から）



8. SK245(奥), SK244(右), SK243(左前)
(南西から)

報告書抄録

ふりがな	はかた127 はかたいせきぐんだい166じちょうさはうこく一
書名	博多127
副書名	—博多遺跡群第166次調査報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1039
編著者名	久住鐵雄(編集・執筆)、吉留秀敏(石製品)、夏木大吾(石製品)、屋山洋(動物遺存体)
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8622 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦 2009年3月 31日

遺跡名	はかたいせきぐんだい166じちょうさ			
遺跡名	博多遺跡群第166次調査			
所在地	ふくおかしはかたくおんまち279ばんない			
遺跡所在地	福岡市博多区祇園町279番地内			
市町村コード	40130			
遺跡番号	0121			
北緯(度)	33° 35' 31"			
東経(度)	130° 24' 51"			
調査期間	2006.9.27~2006.12.18			
調査面積	237.9m ²			
調査原因	店舗付共同住宅ビル建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	中世(平安時代後期~鎌倉時代)、古代(奈良時代~平安時代前期)、飛鳥時代、古墳時代(弥生時代)	〈第1面(近世、中世前期)〉井戸3、土坑50以上、溝1、瓦器(陶器品を含む)、土中須恵器、瓦質土器(中世)、土師器(中世)、瓦(中世)、馬糞(中世)、須恵器(古墳時代後期~古代)、土器群(古墳時代後期~古代)、土器群(古墳時代後期~奈良時代)、壇状遺構(大溝、弥生土器、ガラス細瓶、土罐、玉作閑道遺物、各種石製品、鍛製品、輪羽口、鍬鋸、船様(素材)?、銅製品(櫛、銅錢残穴)	輸入陶器器(白磁、青磁、青白磁、青花、褐釉陶器など)、瓦器(陶器品を含む)、土中須恵器、瓦質土器(中世)、土中須恵器、瓦質土器(中世)、土師器(中世)、瓦(中世)、馬糞(中世)、須恵器(古墳時代後期~古代)、土器群(古墳時代後期~奈良時代)、弥生土器、ガラス細瓶、土罐、玉作閑道遺物、各種石製品、鍛製品、輪羽口、鍬鋸、船様(素材)?、銅製品(櫛、銅錢残穴)	中世前期(12~13世紀)の濃密な遺構(中世都市の一部)、古墳時代後期~奈良時代の集落、古墳時代前奈良時代の集落、古墳時代前奈良時代の出土、朝鮮半島系土器(古墳時代~古代)、輸入品を含む外來系古式土器、大型土壙の周溝の可能性のある壇状遺構(大溝)の検出、玉作閑道遺物の出土、須恵器給合付鏡、銅製品(櫛、銅錢残穴)

(注)世界衛指系による。

埋蔵文化財調査基本情報一覧表

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	166次	調査略号	HKT-166
調査番号	0646	分布地図図幅名	49. 天神	遺跡登録番号	0200121
事前審査番号	18-2-179	調査原因	店舗付共同住宅建設	敷地面積	943.65m ²
調査期間	平成18年(2006年)9月27日~同年12月18日	申請事面積	258.0m ²		
調査地	福岡市博多区祇園町279番地内	調査面積	237.9m ²		

福岡市
博多 127
—博多遺跡群 第166次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1039集
2009年3月31日

発行 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1丁目8番1号	印刷 有限会社 森田印刷所
--------------------------------	---------------

